

# 山びこ通信

2011-2012

冬

山の学校  
クラス紹介

Disce libens.

## 山の学校の取り組み——文字を使った学習を大事にするために

文・山下太郎

カエサル（シーザー）の残した『ガリア戦記』によると、ガリアの支配階級ドルイド僧は教育を行うにあたり文字を使わず、弟子には口伝で教義を伝え、文字に記録することを許しませんでした。「学ぶ者が文字に頼って暗記に精を出さなくなるため」とカエサルは説明しています。

言うまでもなく、暗記は学びの基本です。教師や親は暗記を励ますことはできても、代わりに暗記してあげることはできません。この文脈でカエサルの言葉を読むとき、確かに「文字が学ぶ者をダメにする」と言えなくはない。そんな気がします。

文字は寛大で、何度同じ事を尋ねても嫌な顔ひとつせずに答えてくれるでしょう。教科書は文字できており、それゆえ学習者は場所を問わず何度も繰り返し学ぶことができます。しかし、この利点が同時に油断の付け入る隙にもなります。つまり、学習者に「また後で…」とか、「(学校でなく)家に帰ってから…」などと、今学ばないことの言い訳をいくらでも許すのです。

逆に、熱心な学習者であれば、今述べた文字の利点を最大限に生かし、「いつでも、どこでも、何度でも」教科書を開き、最大の学習成果をあげるでしょう。要は、文字とのつきあいが問われているのです。私見を述べれば、文字のある学習を大事にするコツは、文字を使わない学習を大事にすることです。

このことを考える上で、日本の伝統的教育にヒントがあります。ズバリ、「素読」です。素読は文字を使いません。学習者は耳で聞いた通りの言葉を口に出して反復します。手前味噌となりますが、私が園長を務める北白川幼稚園では、過去60年以上にわたり、年長児は「俳句の素読」をします。また、山の学校では熱心な小学生たちが「論語の素読」に取り組んでいます。私は子どもたちに、耳で覚えた言葉を正しく文字に直せとは言いません（それをすると本来の狙いがぼやけてしまう）。その瞬間最大限に集中するという態度を養う上で、素読の効果は歴史的に見ても実証されています。

素読とはいわば、文字の断食です。食を断つことで逆に食べる力が整えられるわけです。文字を断つことを通じ、文字のある学習がいつそうありがたく思われ、それを口にするこへの憧憬の念がかきたてられます。「有り難さ」を知るには、「有る」ことが「難い」状況を体験するのが一番です。

次に注目したいのが、ヨーロッパの伝統的教育としての「対話」です。「文字を使わない学習」というとピンときませんが、人と人が目を見て行う「対話」は、古代ギリシャ以来大切にされてきた学びの方法です。あることについて知っているかどうかは他人に説明してみればわかります。言葉に詰まったり、(知識のあやふやさから)話しくさを感じたら、再度勉強しなおして知識を補充します(その際文字を使った勉強に意味が出てくる)。どうしても印刷された文字を通じての学習が中心となる昨今です。自分の知っていることや考えていることを確認するためにも、文字のある勉強のありがたさを再認識するためにも、ときに他人の目を見て発表したり、疑問に思ったことを相手に質問する経験は、今後ますます重視されるでしょう。ただ、一般には学校にこのことを期待するのは難しいと思います。どのようなレベルの学校であれ、1クラスの定員が10人を超えると、自由闊達な「対話」を実現するのはやはり困難です。

その点、山の学校では、1クラスの定員を5名としています。その理由は今述べた「対話」による学びを重要とみなすためです。学校でもクラスで発表する機会はあると思いますが、主となるのは黒板を使った一斉授業です。私自身その恩恵を今も感じていますし、今後もこの文字を使った学習スタイルが学校教育の基本となるでしょう。だからこそ、放課後の私塾である山の学校では、先生と生徒が自由に言葉をお互いにかかわることのできる学習環境を整えたいと考えます。学校教育の補完としての意義ここにあり、ということです。

望ましいのは、学習者がハツラツと勉強に取り組む環境づくりであり、そのためには、文字に頼らない学びの取り組みにもっと光をあてる必要があると考えます。その意味で、最後に強調しておきたいことは、私が述べたことは何も難しいこと、目新しいことではなく、各家庭で実践できることばかりだということです。まずは、素読はなくても素話を！と言いたいところです。親が子に語る素話や本の朗読の習慣は、子どもが一人で文字を追うための基礎を作ると同時に、何よりも子どもにとっては心に残る一生の宝になるでしょう。(次ページへ続く)

次に、対話ということについては、その基本はまさに家庭にあります。小さい子どもはあれこれ親に質問してきます。その一つ一つに付き合うことは難しいでしょうが、そのいくつかについて、可能な範囲で親が誠実に答えるなら、そのやりとりは子どもの心に大切な学びの姿勢を宿らせます。大人自身、わからない言葉の意味を辞書で確かめる…。その姿勢が子どもに大事な何かを伝えるでしょう。また、司馬遼太郎も書いていますが、「めし、風呂、寝る」といった単語の羅列でなく、文章語にした言葉のやりとりを日頃から大人が心がけることも、子どもの学びの環境づくりの上で大切です。

このような土台ができてこそ、文字を使った学校教育のありがたみがひとときわ輝くのだと思いますし、山の学校としても、その光がいつそう明るく確実に子どもたちの心を照らすように、できるだけのことをしていきたいと考えています。次頁以下はそのささやかな実践例です。忌憚のないご意見、ご感想を頂ければ有り難く存じます。

(——山の学校代表・山下太郎)

## 冬学期時間割

・クラス名横の(P～)は冬学期のクラス紹介のページです。ぜひ一読下さい。  
(掲載のクラス名は、春学期の予定ではございません。春学期時間割は別紙をご覧ください)

	午前(9:10-15:30)	1(16:20-17:20)	2(17:30-18:30)	3(18:40-20:00)	4(20:10-21:30)
月	将棋道場(p17) (月1回 16:00～18:00)	つくる(p8) (16:30～18:00 隔週)	漢文入門(p27) (17:10～18:30)	イタリア語講読(p28)	高校英語(p22) ラテン語入門(p31)
火		しぜん A(p6) かいが A(p3) (15:50～17:20 隔週) かず1～2年(p14)	ことば3～4年 A(p10) かず5年(p14)	中学ことば(p18) ギリシャ語入門 A(p32)	中1～2英語の基本(p19) ギリシャ語初級講読(p32)
水		ことば1～2年(p9) かず4年 A(p14) 経済学入門(p26) (16:00～17:20)	ことば3～4年 B年(p10) かず4年 B(p14) (17:45～18:45)	かず6年(p16) 中3英語の基本(p20)	中学数学(p22) 歴史入門(高校)(p19) ラテン語初級講読 A(p29)
木	英語一般(p27) (14:10～15:30) ラテン語初級講読 B(p30) (14:10～15:30)	しぜん B(p7) かいが B(p3) (15:50～17:20 隔週) ことば6年(p14)	ウェブプログラミング入門 (17:10～18:30 隔週)	中学・高校英語(p21)	中学理科(p24) 高校数学(p24) ラテン語初級文法(p29)
金		ことば3～4年 C(p12) ことば5年(p13)	かず3年 A(p16) かず3年 B(p14)	ロボット工作隔週(p25) ユークリッド幾何隔週(p23) ギリシャ語中級講読(p32)	フランス語入門(p29) (19:50～21:10) ラテン語初級講読 C(p31) ラテン語中級講読(p31)
土日	ギリシャ語入門 B(p32) (土 14:00～17:00 隔週) フランス語講読(p29) (日 9:10～12:00 隔週)	行列の意味(p26) (土 14:00～15:20)			

## 新クラス・開講可能クラス

他にもご希望のクラスがございましたら、お気軽にお問い合わせ下さい。講師と相談した後お返事いたします。

### 『確率・統計の考え方』

対象：中学生以上 講師：浅野直樹

一般にデータから価値を汲み取ろうとする際には唯一の正解というものはありません。確率・統計に騙されず、正しく考えるための思考法の訓練を共にすることができればと思います。

### 『調査・研究入門』

対象：中学生以上 講師：浅野直樹

興味のあるテーマを自分で設定し、そのことについて調べ、まとめます。文献収集や構成などのお手伝いをします。意欲的な中高生、論文やレポートを抱えた大学生、調べたいことがある一般の方をお待ちしております。

### 『新約聖書ギリシャ語入門』

対象：一般 講師：広川直幸

『新約聖書』を原典で読みたい方を対象としたギリシャ語入門クラスです。教科書はメイチェン『新約聖書ギリシャ語原典入門』を使用します。

### 『ロシア語講読』

対象：一般 講師：山下大吾

プーシキンなど19世紀ロシアの古典作家の作品を中心に、受講生と相談の上テキストを選択します。初めてロシア語を学ばれる、あるいは再挑戦される方々を対象にした入門コースも開設予定です。

### 『イタリア語入門』

対象：一般 講師：柱本元彦

中学レベルの英語力を前提にした<ゼロから学ぶイタリア語>です。講談社現代新書『はじめてのイタリア語』と一緒に解説しながら、楽しく(イタリア関係の雑談を交えながら)進めて行きたいと思っています。

## ●「原料さがし」から始める絵

かいがクラスでは例年「貼り絵」をする機会がありました。貼り絵は生徒達に人気の課題であるだけでなく、ある程度の時間と根気を要し、その分重みの詰まった素敵な作品を生み出します。今回は、「落ち葉」を使ってそれをしようと考えたのが、この取り組みのきっかけです。



「あ、はなびら！これも使いたいな！」「カタツムリの殻、これも使えるかな…？」「枝も使っているの？」葉っぱの他にも、森の中、園庭の隅など、いたるところに色々な原料が。

いざ材料集めに外へでかけると、様々な色形をした落ち葉があり、他にも紙に貼り付けられそうで、絵づくりに使えるような自然のものが見つかります。例えば小石や砂、小枝や木の実といったものです。そういった「自然の素材を接着剤で紙に貼り付ける」という行為について、ここで一旦足を止めて考えてみたいと思います。

私たちが一般的に絵画に用いる「絵の具」とは何でしょうか。大雑把に言ってしまうと、一般的な絵の具は、「色のもととなる細かい粒子（顔料）」と「接着剤」から成っています（この「接着剤」の種類によって、「水彩絵の具」「油絵の具」「アクリル絵の具」などと呼び名が変わり、特性が変わります。クレヨンや色鉛筆など固形のものについても基本は同じ成り立ちです。また、実際の顔料は、鉱物を主体とした自然のものが起源であることを紹介し、そのことを心に留めてもらいました。実はそれが、今回の取り組みの要です。）

さて、拾い集めた素材、例えば落ち葉を貼り付けるとき、葉っぱ固有の形を生かして貼ることが最初に考えられるでしょう。次に、ハサミで切ったり手でちぎったりして、断片にして貼ることが考えられます。さらに細かくしてゆき原型を留めなくなった葉は、「色味」として使うことが出来るでしょう。さらに細かくすりつぶして粉のようになったものを接着剤と練り合わせて貼り付けるなら、これは「自分で絵の具をつくり、絵を描いた」ということになるのではないのでしょうか。



採取物に、早くも各々の個性が表れます。上は赤いものばかりを集めたMちゃんの例。



押し葉にしておいた葉と2週間ぶりに対面すると、色が渋くなったもの、意外なほど赤や緑の鮮やかさが保たれているものなど、葉の種類によって変化が違うことを発見！それらを並べながら絵を考えます。枯葉は、すり鉢を使うと粉々にもできます。粗い破片



をふるいで取り除いたら、さらに乳鉢で細かくすり潰すこともできます。



それぞれ赤・黄・白・緑・黒色っぽい5つの色を作れました。実は、これらの砂、みんなが駆け回っていた、あの園庭の砂なのです！

さて、5種類では済まないのがY君です。「これとこれも違うでしょ、それからこれも…」ピンセットでより分けながら、多くの色を発見しました。根気さえあれば、数色の「園庭絵の具」を作るのも夢ではないはずです。



基底材にはボール紙を使用。そこに下地剤を塗る作業も各自が体験しました。刷毛で塗るか、ローラーで塗るかで、表面の質感が変わるので、気に入った方を選択します。下地から絵づくりをする楽しさや、「絵肌」の面白さを感じてもらおうことも、この取り組みのねらいです。



制作を進めるうちに、下地の彩色を試みる人がでてきました（既製の絵の具を使用）。こうした自発的な挑戦は大歓迎です。その効果やいかに…。

2つのふるいを使うと砂は、粗い粒、中くらいの粒、さらさらの砂に分かれ、これだけで、色味も質感も異なる3つの原料となります。試しに、粗い粒を、一粒一粒色別により分けると…



このように、各自が絵画の物質的仕組みの基本を念頭に置き、自分で見つけた「原料」を、どのように用いることができるか考えながら、様々な工夫を試みました。たとえば、自分たちで集めてきた砂をふるいにかけて、その砂には、普段は気づかないさまざまな表情が秘められていたことに気づきます。まずみんなが興味を持っていたのは、そうやって浮き彫りになってくる、砂たちの表情でした。また、ふるい分けられた砂の手触りをみんなが自然と楽しんでいたことも、印象的でした。「手触りで描く」というか、そういう見る以外感覚も、絵画の制作には大切な要素だと思います。そうした、原料が持つ質感を感じながら自分で「絵の具」を作っていくことは、それ自体、なかなか体験できないことだと思います。そうした自分の「絵の具」で、自分の絵を描くなら、なおさら！

## Aクラスの作品



Iちゃんは、ありのままの葉の形や色に魅力を見出しています。画面左上の少し変わった形の葉も、実は左右対称の虫食いによって自然にできた形です。目には大きめの砂粒を利用しています。

彼女の表す世界には、喜び、祝福、そんな言葉が似合います。Sちゃんの絵は、リズムカルに並んだ植え込みや、画面を上下に分ける横の軸線が面白いですね。実に多くの要素を用いながら、心地よい調和を感じさせます。地面の重ね塗りは、深みある表現となりました。IちゃんもSちゃんも、じっくりと構図を練っていましたね。下はそのプロセスです。(下左：Iちゃん、下右：Sちゃん)



水草に用いた笹のとんがりと、岩に用いた葉のぎざぎざが、素敵なハーモニーとゆらゆら感を生み出しています。細かい細工やレイアウトに、じっくりと時間をかけ、丹念に制作を進めるのが彼のスタイルです。「あ、スースーした湿布みたいな匂い！」すり鉢でクスの葉を粉にしているときの発見です。3種類の葉の粉は、少しずつ色合いが異なります。

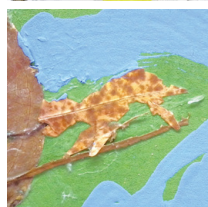


見慣れた葉の形のはずなのに、それをそのまま生かすことによって、魚のような、天使のような、ユーモラスな生き物を誕生させました。自然にできた、枯葉のわずかな欠けた部分を口に見立てています。何とMちゃんは、幼稚園の頃に集めて冷凍保存していたというドングリの瓶詰めを、家から持ってきました。殻を割って出てきた中身は黒くて、自然と半分に分かれたので、生き物の目として使いました。独特の浮遊感のある作品です。



Hちゃんは、想い描いているイメージがはっきりしているのでしょう。素材の持つ色や形を次々とそのイメージに当てはめてゆくように、自由自在に葉を加工する姿に勢いがあります。ある日のクラス、「ぴったりのがあった！」と、石段を上る途中で摘んできたシダの葉を嬉しそうに携えてきました。制作の終盤には、それらを用いた巨木がずっと画面を突き抜けて立ち上がりました。壮観です。遊び心と楽しさがぎゅぎゅ詰まっています。

## Bクラスの作品

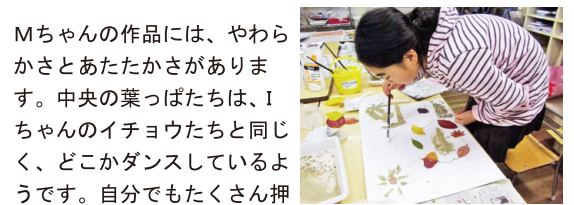


日頃から虫の世界に慣れ親しんでいるためか、Y君は「虫の眼」を持っています。それは、素材のほんのわずかな違いにも気づき、表現の微妙な違いにもこだわることのできる、豊かな感受性の異名です。一滴ずつ色を混ぜるしぐさ、ピンセットで石の色を分類する手つき、小さな葉っぱの模様にもヒョウを見るまなざし——

ゆっくりとした、でも重くない、繊細な歩みが、彼の大好きなサバンナの風景をかたちづくりします。そして、だからこそ、作品の仕上げに、そのサバンナに河を通すときの大胆さには、目の覚めるような感動を覚えました。画面を俯瞰して、ゆっくりと絵筆を滑らすたずまいは、今まさに画竜点睛を行わんとする気迫に満ちていました。彼は、「虫の眼」と「鳥の眼」を行き来できる柔軟な感性を持ち合わせています。(彬) 絵画が映画や音楽と同じ時間芸術の側面をもつことを、改めて思い起こされました。(健)



I ちゃんの絵には物語があります。素材となる落ち葉を探しに入った森の中で「あ！あの夕日を描く！」と。赤や橙の葉っぱをすりつぶして空の中に散りばめたのは、あのときの夕日の光です。絵の下には、その夕日を見ている自分が。また、森の木々に囲まれてダンスを踊るイチョウたちも、自分の分身なのかもしれません。イチョウにまぎれた中央の木は、「イチョウのダンスをまわりで見ていて、がまんできなくなって躍りだした木」（I ちゃん談）。(彬) 広場の出入り口にさしかかり、秘密の舞踏会を目の辺りにしている二人の、胸の高鳴りを想像してしまいます。(健)



M ちゃんの作品には、やわらかさとあたたかさがあります。中央の葉っぱたちは、I ちゃんのイチョウたちと同じく、どこかダンスしているようです。自分でもたくさん押し葉をして持ってきてくれた、色とりどりの葉っぱたちが、くるくると舞っています。(彬)「ねえ、どこいくの？」と、葉っぱ達の声が聞こえるよう。M ちゃんの絵の奥には、楽しい旅行の思い出が潜んでいるのかもしれない。(健)



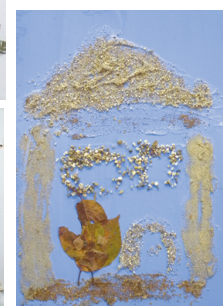
R ちゃんの作品の中心には、「人」がいます。彼女はいつも、まず画面の中央に人型に葉っぱを並べるところから、制作を開始します。「人」は、すりばちですりつぶした葉っぱや、すすきの綿毛を使って描かれるときもあります。暖かく、柔らかい表情です。そして、その「人」から広がる空間を、周りに描いていくのです。おそらく彼女は、日頃からそのように世界を見ているのでしょう。(彬) 背景に使った紫色が、落ち葉のじゅうたんや少女の黄金色を一層引き立てていますね。燃えるようなグラデーションの髪飾りも素敵です。(健)



T ちゃんの描く絵は表現が緻密で、それはそのまま、現実の世界がもつ解像度の高さに似ています。きっと彼女の中には、自分だけの豊かな領域があるのでしょ



う。作品を見れば分かります。そうした内的な世界が、現実と同じだけのリアリティをもって、彼女のキャンパスに投影されています。(彬) 立体感のある杉の葉や木の実がアクセントとして効いていて、しかもさりげないです。散りばめられた葉の破片が、素敵な空気感を生み出しています。(健)



K 君の作品には、うねるような躍動感があります。彼がいつもクジ

ラやイルカを描くのは、自分の表現したいダイナミズムにいちばん近いモチーフだからかもしれません。クワガタを描いたときも、それはいまにも動き出しそうな迫力を持っていました。たとえば、クワガタのツノの部分が、砂であるにもかかわらず、筆の跡のような動きを持っています。(彬) 接着剤を敷いた上に砂や葉の粉末をふりかける画法を大変気に入ったようです。余分な粉を落として形が表れる瞬間は本当に楽しいですね！(健)

(文責 梁川健哲 高木 彬)

## ● 石の作品づくり

『特別な石探し』の取り組みをきっかけに、9月から続けて来た沢での石採集。そこでの発見や楽しさを、多くの人に伝えたい。そんな思いから、集めた石で作品を作り、作品展を開こうということになりました（前号をご覧ください）。以来、各自が自由な発想で作品づくりを続けています。作品展は3月12日～16日の予定です。どうぞお楽しみに！



自分だけの石標本を作るため、形や質感など、石の特徴から感じられたままに、石を名付けていきます。次に、どう並べればより良くなるか、見る人に伝わるかを考え、何度も並べ直しているうちに、幾つかの種類があることを発見します。例えば、「おにぎり石」「ようかん石」等は「食べ物石」という仲間としてまとめればよいようです。徐々に明快な並びになっていきました。H君は分類、整理していく難しさと面白さを発見したようです。（左写真の石は、何石でしょうか。 ヒント：食べ物）

石に絵の具を塗る感触を無心に楽しむMちゃん。石は空色に。「本当に、手を伸ばして空をぱっと掴んできたみたいだね！」『空のかげら』だね！」



トナカイの完成を目指して意気込むYちゃん。小枝から角の部分を取り出します。顔と鼻は石です。このように、石を生かしつつ、色々な自然の素材との組み合わせも試みます。



今度はクマの顔に見えた石に、目鼻口をペイント。胴体も作りしました。「やった！キャンプ場の椅子に座せられた！」



Y君の旅客機。今にも音を立てて飛びそう！



「メダカも作ろう！」K君は石の中に次々と魚の形を見出し、あっというまに何匹も作っていきました。ちょうど、M君も魚やワニなどの水棲生物を作っ



ていました。これは水族館のような展示になりそうだと見て、M君は早速看板を作りました。みんな、伝えようという強い意識を持っています。左の6匹



がK君、右の2匹がM君作。他にもまだまだいます。それが何であるかは、是非、作品展でお確かめ下さい！



## ● いつもの発表会

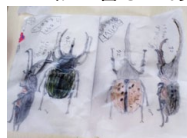
しぜんクラスでは、毎回最初の20分程を、みんなが持ち寄った自然についての発見を発表する時間にしています。それらは、文と絵で一枚の用紙に綴る「しぜんにつき」の他、飼育している昆虫や、道ばたで見つけた草花を持参してくれる場合もあります。口頭のみでの発表もあり、ごく身近な物事から宇宙のことまで、毎回様々な話題で盛り上がります。ここではその様子を一部、ご紹介致します。



Y・N君は家からアカハライモリを持参してくれました。赤いお腹をみんなで観察します。ある時は、カブトムシの幼虫を持参し、雄と雌の見分け方も伝授してくれました。彼は生き物博士です。最近では、写し紙に好きな生き物を集めています。そこには自分で図鑑を編集することに似た喜びがあります。



Mちゃんは庭にあったムラサキシキブや、落ちていた何かの実を持参してくれました。土に植えたそれぞれの種は、現在経過観察中です。



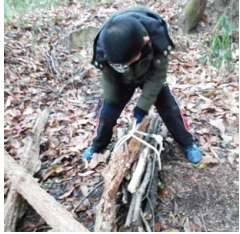
Rちゃんは、葉っぱや実をつるした素敵な壁かざりを、自宅で作って持ってきてくれました。別の日には、葉っぱを台座にして石を展示するアイデアを思いつきました。また、しぜんにつきには、捕らえようとしたはさみ虫が、被せた容器を乗り越え、排水溝の方に自分から落ちていくまでの一幕を、ありありと綴ってくれました。



## ● 焚き火をしよう

クラスでは、寒い季節に焚き火を行うことがあります。例えば去年は、焚き火を利用してバームクーヘンを焼きました。炎の熱さにも負けず、生地を塗った竹の芯を回し続け、苦勞して焼き上げたバームクーヘンの味は、格別でした。今回の焚き火では少し趣向を変え、より焚き火の本質を感じてもらえるよう、まず、クラス一回分を薪集めの時間にあてました。かつて火は、生活の中心を担っていました。スイッチ1つでガスや電気を使える環境に生まれた私たちや生徒達にとって、そうした暮らしのことを想像するのは、必ずしも容易ではありませんが、実際に薪を集め出すと、「ああ、これが生きることなのだ」と感じられる瞬間があります。そこまで大げさに感じてもらうかどうかは分かりませんでしたが、「焚き火をする」という目的で心を1つにし、「テグス結び」で輪にした縄を一人一本携え、みんな意気込んで森へ入って行きました。

### ・山へ柴刈りに



1年前に作ったひみつ基地はすっかりと崩れ、今ではちょうどよさそうな薪の山になっていました。これは、使わない手はありません！

丁度いい枯れ枝はないかと森の中を見渡せば、そこら中が宝の山でした。はりきって、大人でも運べないほどの丸太を引きずってくる男の子。すかさず周りが駆け寄り一緒に抱え上げます。Yちゃんは、その枝を運べる長さにするために、大人の手を借りることもなく、最後までノコギリを引きました。切り口の横から冬眠していた虫が、によきと顔を出しました。「じゃあ、こっちの方は置いていこう。」Rちゃんが言います。

みんな、驚くほどの手際の良さと、チームワークでした。



こんなに集めたよ！

### ・火をそだてよう



小さな枝や葉っぱをあつめて、そっと火をつけます。風に消えてしまわないように、みんなで囲んで、火が生まれるのを見守ります。

「あれ？消えちゃったかな？」  
「そーっと息をふきかけてみよう。」  
「あ！火が生きてた！」小さな火の「赤ちゃん」誕生の瞬間です。さあ、消えないように、どんどん「ごはん」を食べさせよう！……「こども」くらいになってきたぞ。

大きくなった火には、そのぶん、たくさん栄養をあげましょう。「ぼくたちと同じくらいの背になったよ！」とM君。



やった！たき火の完成！



自分で薪を拾って、自分でたき火を起こして、自分で焼いた、餅を食べる。「おいしい！」——そのおいしさを、どうか忘れないで。



時間の都合で、摩擦や火打ち石を用いるような過程は経みませんでしたが、また機会があれば、挑戦してみたいですね。

(文責 梁川健哲、高木 彬)



## 『百聞は一見にしかず!』

まずはこの左の写真をご覧ください。この生徒たちの「誇らしげな笑顔」こそが、私がこのクラスを作りたいと思った理由であり、生徒たちと共有したかった一番の思い出です。

私自身、「ダンボール箱の中に入って何かをする」という体験は、今でも胸が熱くなります。時間を忘れた思い出は忘れることができないものです。私にとってダンボールとの付き合いとは、そうした古典的な思い出でした。そしてそれは大人になっていく途中の様々な局面で、励まし、支えてくれたものでした。そのように後になればなるほど強く思います。

もしそのことが私だけの個人的な体験ではなくて、もし他にも共感して下さる方がおられるとするならば、おそらくダンボールの思い出には普遍的な「何か」が含まれているのでしょう。

ところで、上のダンボール戦車で私が手伝ったのはキャタピラ部分だけです。あとはすべて、生徒たちの創意工夫によるものです。たとえば、細長い筒にゴムを取り付け、そこにスティックのりの空筒を入れて飛ばす「大砲」は、思いもかけないアイデアでした。

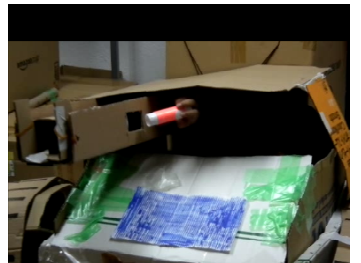
それを生徒が発案してくれた時、正直言うと、私は（果たして、そんなことができるんだろうか…）という不安が先に立ちました。しかし、彼らは「やってみよう」とする気持ちに従って、それを実現したのでした。「先生、できたよ!」と言うので見に行くと、「おお〜!」と驚かざるを得ませんでした。「ほら、前に弓矢作ったでしょう。あれと同じようにしたの」と。なるほどそうだったのか、と感心しました。

単にゴムに引っかけるのでは、のりの空筒が細長いことから、安定してうまく飛び出さないことに気付いた彼らは、カタパルトのように、ゴムの真ん中に固い皿を取り付け、そこに弾を「乗せる」ということで、この困難を解決したのでした。その飛距離と命中精度の高さと言ったら! そして筒の横に弾込めのための四角い穴をあけ、装填のしやすさまで考えられた設計には、私自身が生徒たちに「負けた!」と思って、たまげたのでした。このように、一つ一つ問題を設定して解決していく様は、言葉に表せないほど頼もしいと感じました。

さて、私が最近になって気付いたことがあります。それは「私にできることとしての、今いる生徒たちを『応援する』ということとは、一体どういうことなのだろう?」という問いを立てた時のことでした。そしてしばらく考えた後に、ふとこのクラスの光景が脳裏によみがえり、それは『共感』なのだという一つの解釈に、腑に落ちたのでした。世代の違う「誰か」に共感してもらえたことが、彼らを支え続けるのです。

その役目は、たまたま私であっても、もちろんそうでなくてもいいでしょう。けれども「誰か」一人でもそうした大人が、彼らのそばにいて、「打てば響く」役目を担うことが重要なのだと考えたのでした。それは勉強とは一見かけ離れているかもしれませんが、人の生身の成長にとっては、何より必要な糧であるはずで、もし教育の目的が個の自立であり、次の世代を担えるようになるまで大きくなることだとするならば、そうした自立のために培ったものは、勉強においても、基礎のまた基礎にあたるものだと考えています。

(文責 福西亮馬)





物語。

それは、人を楽しませるもの。励ますもの。導くもの。赦すもの。喚起するもの。涙の器。希望の泉。未知の世界。あたたかい場所。よりどころ。物語との出会いは、善き友人、あるいは善き先生との出会いに似ています。

秋学期の中盤から冬学期をとおして、このクラスでは、長編作品で物語の世界を体験してもらおうと、ヒュー・ロフティンクの『ドリトル先生物語』(ポプラ社)を読んできました。ドリトル先生は、動物の言葉がわかるお医者さん。その評判は、動物たちのあいだでたちまちひろがります。渡り鳥たちの口伝で、遠い外国までも届きました。そのようにして、各地からいろいろな種類の動物たちがドリトル先生のもとへ訪れるようになりました。



あるときドリトル先生は、猿回しの旅芸人にこき使われていたチーチーというサルを助けます。そこでチーチーから、アフリカにいる何千という自分の仲間たちが流行病に苦しんでいることを聞きます。ドリトル先生は立ち上がる。仲間を動物たちを連れて、アフリカのジャングルの奥地にあるサルの国への冒険に出発するのです。

そこにはいろいろな困難が待ち構えていました。アフリカで現地のジョリギンキ国の兵士に捕まって牢屋に入れられたり、荒くれ者の海賊に追いかけられたり。しかしその度に、仲間の動物たちと力を合わせることで、困難を切り抜けていきます。しかも、行く先々で、初めて会ったはずの動物たちがドリトル先生一行を助けてくれる。そう、ドリトル先生は、動物の世界で最も信頼されている人間なのです。

それぞれの動物には、それぞれの特徴があります。イヌのジップは鼻が利く。オウムのポリネシアは人間の言葉が話せる。フクロウのトートーは目と耳がいい。ツバメは速く飛ぶ。いくらドリトル先生が名医でも、たった一人で、アフリカの奥地に向かい、何千頭ものサルたちを救い、そして無事に帰ってくるなどできません。『ドリトル先生物語』で描かれているのは、動物たちが、それぞれの個性を発揮し、自分にできることを最大限に出し切ることで、大きな目標を達成していく喜びです。

小学校1年生と2年生のこのクラスで『ドリトル先生物語』を読み終わったとき、まず私が感じたこと。それは、こうしたドリトル先生一行の歩みは、どこかこのクラスの歩みに重なるということでした。『ドリトル先生物語』は、けっして短いお話ではありません。クラスの一人ひとりが一冊ずつこの本を手に持ち、ページごとに交替しながら朗読を進めていくこと。自分が朗読したページを原稿用紙に筆写すること。それは、取組みの方法としては、とてもシンプルなものですが、それを毎時間かかさず継続することは、並のことではありません。この物語を最後まで自分たちで読み切ることができたのは、一人ひとりが持つ良さに、クラス全体が触発されてきたからだと思います。

**K**ちゃんは朗読が得意です。このクラスで朗読は、一文ごとでもなく、段落ごとでもなく、ページごとに交替します。最初はちょっと長いかなと思いましたが、しかしKちゃんは、いつも1ページを元気よく、見事に読み切ってくれました。「すごいね」と褒めると、「そんなんでできるで！」と自信に満ちた言葉が返ってきます。100を超える全ページをこのクラスで朗読できたのは、彼女の牽引のおかげです。

**S**ちゃんは物語の意味に敏感です。朗読の後、面白かったところや分からなかったところを積極的に話してくれるのはもちろん、朗読のあいだも、「うん、うん」とうなずき、楽しいところは楽しいように反応してくれます。ジョリギンキ国の隊長の「とても大きな耳」が木の枝に引っかかったとき、すぐ笑顔になったのはSちゃんでした。物語を体験するクラスの雰囲気は、彼女が生んでくれていました。

**R**君は想像力が独創的です。『ドリトル先生物語』には、頭が2つあるユニコーンの子孫「オシテオサレテ」が登場します。そこで、このクラスでも未発見の動物を想像して書(描)いてもらいました。R君が想像したのは「ライニン」と「きつとねら」。それぞれが別種の動物の組み合わせであり、かつ彼らはずっと一緒に行動しています。既成の概念にとらわれない発想には、みんな刺激をうけていました。

**H**ちゃんは筆写の字が丁寧です。彼女はいつも、椅子の上で正座して原稿用紙に向かいます。「だっていつもお習字の時間は正座してるもん」とのこと。原稿用紙の一字一字に、習字並みの気持ちを込めます。彼女に触発されて、筆写の時間は、美しい字への真剣な挑戦の時間となりました。みんなの筆写のページを集めてこのクラス版の『ドリトル先生物語』を仕上げるのがとても楽しみになりました。

**T**ちゃんは想像力が豊かです。アフリカを出航した後、ドリトル先生の船が次に立ち寄る島を想像してもらったら、ソーダの雨が降ってキャンデーのブドウがなる“お菓子の島”や、家々がそれぞれ別の本の中の世界になっている“本の中の島”など、次々と島を生んでくれました。まさに「溢れ出る」という形容がぴったりくる彼女のアイデアは、クラスのみんなを触発せずにはおかないものでした。

この記事を書いている現在、クラスでは物語づくりにチャレンジしています。自分で想像して描いた島の絵をもとに、アフリカから帰る途中のドリトル先生一行がその島へ立ち寄ったらという設定で、書き進めています。なかには、かつて自分が作った動物を登場させてくれる生徒さんもいます。まだ書きはじめたばかりですが、どんな物語になるのか、今から楽しみです。

新しい物語は、いつだって見知った物語をゆりかごにして育ちます。彼らが、いつしか誰かを楽しませる側、励ます側、世界をつくる側になることを願っています。

(文責 高木 彬)

## 『ことば』 3～4年生A (火曜2限) 担当 岸本廣大

冬学期、このクラスは一年を通じて行ってきた読書と、新たな取り組みである物語作りに取り組んでいます。物語作りはまだアイデアを練っている段階ですが、読書の方は『ガリバー旅行記』の「小人の国」を読み終え、感想文を書いてもらっているところです。感想文といえば、苦手意識を持っている子供さん（あるいは大人の方）もいらっしゃることでしょ。そこで、この山びこ通信では、私なりの感想文の書き方を述べていきます。少しでも苦手意識を払拭してもらえればと思います。

感想文に対する苦手意識は、まず何を書けばよいのかわからないという点にあると思います。単なる感想であれば、「楽しかった」、「悲しかった」、「面白かった」と一言ですむわけですから、それ以上何を書けばよいのか悩んでしまうわけです。しかし、重要なのは「単なる感想」と「感想文」は異なるということです。感想文にも、単なる感想はもちろん必要ですし、それが中心になるのは確かですが、それだけでは不十分なのです。「楽しい」と感じたのはどの場面なのか、どうして「楽しい」と感じたのか、その「楽しい」とは「ワクワクするような楽しさ」なのか、それとも「笑える楽しさ」なのか、単なる感想では伝えきれない事柄も一緒に含んで初めて、感想文となるのです。

秋学期に読み終わった『オオカミ王ロボ』を例にみてみましょう。単に「ブランカ（雌オオカミ）がかわいそうだった」という感想だけでは、それを聞いた人は具体的にイメージできず、その感想に共感しづらいでしょう。しかし、実際子供さんに書いてもらった感想文では、ブランカが罠にかかり、それが岩に引っかかって逃げられなくなった場面が、ラッソ（投げ縄）で殺されるというその後の運命を考えるとかわいそうだった、と表現していました。感想を抱いた場面、理由などを付け加えるだけで、イメージしやすくなったのではないのでしょうか。

感想文では、自分の意見を述べることもできます。もう一人の子供さんの感想文を見てみましょう。子供さんにとって、読書前のオオカミのイメージは、「こわい」、「悪者」、「ずるがしこい」というものでしたが、読書後の感想文では、そのイメージががらりと変わっていました。ブランカが捕獲された後、ロボがカウボーイの家を襲撃したのは、ブランカを助けるための行動だったと考えて、「オオカミ王」のロボが実は優しかったと主張したのです。これも、単に「ロボは優しい」というよりも説得力をもっており、さらに言えば、新しい読み方も提示しています。

子供さんの事例も見ながら感想文の書き方を述べてきましたが、大事なのは自分の感想をできるだけ具体的に読み手に伝えるということです。読書によって語彙や表現の幅を広げたならば、それを用いて今度は情報発信していきましょう。情報社会と呼ばれる現代において、この力は今後にきっと役に立つはずですよ。

(文責 岸本廣大)

## 『ことば』 3～4年生B (水曜2限) 担当 高木 彬

このクラスでは、秋学期に引き続きサン＝テクジュペリの『星の王子さま』(岩波書店)を読んでいます。長編の物語を読むということ、一人一冊ずつ自分の本を持つということ、毎回のクラスの進め方については、秋学期の山びこ通信の記事に譲ります。冬学期では、この記事を書いている現在(2月3日)までにXIV章まで読み進めています。ここでは、その内容と、クラスでの対話、そして生徒さんたちが書いた文章などについてお伝えします。

秋学期では王子さまの故郷の星をみんなに想像してもらいましたが、冬学期に入り、いよいよその星の具体的な様子が明らかになってきました。そこは、うっかりバオバブの木が生えてしまうとその根で破裂してしまうほど、小さな、小さな、星でした。王子さまは毎日、他の星から飛んで来たバオバブの種がこの星に根付かないように、雑草を抜きます。つまり「星のおけしょう」をするのです。そうして、自分の星を守っている。「星のおけしょう」——なんて素敵な響きでしょう！もしも自分が「星のおけしょう」をするなら、どんなことをするでしょうか。「いい草花の世話」をする、と書いてくれたのはK・Tちゃんでした。「いい草花は、きれいなかわりにとても身のまわりのことにはびんかんだから一本でもかかるとほかの草花までかかれてしまう」。その花は折れやすい、だからたんに世話をするだけじゃだめだ、本当に手をかけてやらなくちゃいけないんだ、そういう切実さとセンチメンタリズムが、K・Tちゃんの文章から伝わってきます。またH・H君は、「星の中に星を動かすきかいがついていて、それでいんせきからよけて星がこわれないようにする」という、ちょっとすぐには思いつかないような、とても独創的なことを書いてくれました。これもやはり、星を守るための「おけしょう」です。こういう想像力の豊かさこそ、まさにこの『星の王子さま』のテーマでもありました。

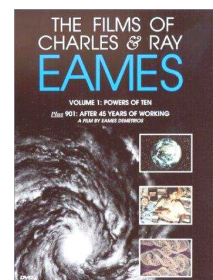
ところで、この「星のおけしょう」のくだりを読んだとき、T・K君が、「バオバブって本当にあるの？」と聞いてくれたのを覚えています。いま思えば、この質問がすべての始まりでした。『星の王子さま』の挿絵を見るかぎり、バオバブの木は、太く高く伸びた幹の上のほうに葉がまとまってついている、奇妙な形をしています。でも、(少なくとも地球には)この木は実在するのです。サバンナでバオバブが草食動物に葉を食べられないように進化の過程で高く伸びていったことを話すと、T・S君は、「じゃあ、キリンもそのバオバブの葉を食べるために首が長く進化したの？」と鋭いことを言うてくれました。キリンの首の進化については諸説ありますが、たしかに高い木の葉を食べるために伸びたというのは有力な見方です。

さて、普通ならこう答えるところまでで、対話は終わるものです。ここまでが、既存の知識を「知ること」だからです。しかしこのクラスの生徒さんの素晴らしいところは、ここから先に進めるところです。「じゃあ、そのキリンに食べられないように、いまもバオバブは伸びてるの？」伸びてるのかもしれませんが。「バオバブが伸びたら、またキリンの首も伸びる！」きっとそうなるだろうね。「じゃあ、1000年後には両方ともすごい伸びてるのかも！」生徒さんたちは口々に進化の夢を語り、いつしか教室には「想像の星」が生まれはじめていました。そして、その星に最初の輪郭を与えたのはY君でした。「2億年後の地球ではスクイボンっていうイカが地上を歩いて、オーシャンフリッシュっていう魚が空を飛んで……」Y・K君は、聞いたこともない動物の名前や生態を次々と話しはじめました。みんな目を輝かせて聞いています。『フューチャー・イズ・ワイルド』っていう本があって、そこに書いてある「え、それ読みたい！」「じゃあ、来週持ってくる」そのようにして、次の週、Y・K君はその図鑑を持ってきてくれました。みんなで1枚ずつ絵入りのページをめくり、それをまたY・K君が解説していくという、格別な時間が流れました。「このクラスでも『フューチャー・イズ・ワイルド』をつくりたい！」という声があったのは、そんな時でした。「あの漢字辞典のときみたいに、このクラス版の図鑑をつくりたい！」そこで、どうせ想像するなら、たんに未来の地球を想像するのではなく、もうこのクラスで星をまるごと一つ創ってしまえばいいのではないかと提案しました。そうすると、動物だけではなく、植物や昆虫、建物や土地など、想像と創造の夢が広がります。星の王子さまも訪れてくれるかもしれません。春学期に創作漢字辞典をつくったのと同じように、毎時間、1枚のページに絵を描いて、その下に解説文を書くというスタイルで、星づくりを進めることにしました。T・S君の「ガーデンツムリ」、Y・S君の「ホッパーレーザークリダチョウ」、K・Tちゃんの「飛土水テントウ」、T・K君の「ハンマーカブト」、Y・K君の「ソーラーライトバチ」、H・H君の「オーシャンハンター」……。100種類に迫る新種をここで紹介できないのが惜しいのですが、みんな本当に乗り気になって、とても創造的な文章を書いてくれています。Y・S君などは、自分でも『フューチャー・イズ・ワイルド』を手に入れて、毎回持参してくれています。冬学期が終わる頃には、またこのクラスで1冊の図鑑にまとめようと思っています。バオバブの話がここまで発展することになるとは、正直、私にも思いがけないことでした。とてもうれしいことです。大いなる脱線、これぞ「ことば」と自発的にかかわる本道だと思います。

このようにして冬学期は、自分たちで星を創ることと並行して、『星の王子さま』を読み進めることになりました。さて、「星のおけししょう」の後には、王子さまが自分の星で最も大切にしている「花」のことが語られます。「だれかが、なん百万もの星のどれかに咲いている、たった一輪の花がすきだったら、その人は、そのたくさんの星をながめるだけで、しあわせになれるんだ。だから、「花」がなくなることは、「その人の星という星が、とっぜん消えてなくなるようなもの」。王子さまにとってその花は、全宇宙に匹敵するくらい大切だということです。大切なものは、身近にあるのかもしれない。でも、どれだけ遠ざかっても、そこにある。その確信だけで、僕のなかの宇宙は生き続けることができる。そうした感覚を体験するために、チャールズ・イームズの『POWERS OF TEN』(Image Entertainment)を観ました。セントラルパークで昼寝をしている人を画面の中心に据えながら、そのまま宇宙の果てまで上空のカメラをズームアウトしていくというショートフィルムです。全宇宙を視野に収めるくらい離れても、その中心にはあの人がいる。みんなには、その中心に自分のいちばん大切なものが置かれていると想像しながら観てもらいました。まず映像そのものが画期的なので、「すごい！」「もう一回みたい！」という声が絶たなかったのですが、宇宙の果てでカメラの引きが止まったときには、「でも、あそこにはまだ大切なものがあるんや」と感慨深げでした。いま君たちが感じていることが、王子さまが星々を見渡したときに感じたことだ、そうお伝えしました。

大切なものって何だろう。それは、「想像」と並んで、この『星の王子さま』の重要なテーマです。それに向きあってもらうために、さっき自分が宇宙の中心に据えたもの(人)を、何か別のものに喩えて書いてもらいました。それはどんな形をしていて、どんな色で、どこにあるのか、自分はどのようにそれを大切に、守っているのか、など。Y・K君とT・S君は、大切なものを偶然にも同じ「ダイヤモンド」に喩えてくれました。「そのダイヤモンドは宇宙で1つだけのダイヤモンドで、あるときは赤色、あるときは青色、またあるときは黄色というように、自分の考えや気持ちによってさまざまな色に変わる」(Y・K君)。「悲しいときは、どうしたのと聞いてくれて、正直に自分がかかえているなやみを言える。してはいけないことをしてしまうと、それはしてはいけないことだよと教えてくれる。(…)時にはおこり、時にはいっしょに笑い、そしてなやんだときにはそのなやみの話を聞いてくれる」(T・S君)。ダイヤモンドが七色に光るのは、その都度の自分の心に寄りそうからだ。——彼らが選んだ大切なものは、むしろ自分のことを大切にしてくれる存在でした。大切にしてくれていると感じられるから、大切にしたいと思うのです。また、T・K君とY・S君は、大切なものを「太陽」に喩えてくれました。「あかるくて、おしゃべりな太陽。みんなに元気をあたえてくれる」(T・K君)。「ぼくはその光がないと生きていけない(…)心の中で今も笑顔にかがやいている、このうちゅうの中でいちばんいちばん大切なもの」(Y・S君)。自分を照らし、育ててくれるから、大切だと感じる。一方通行ではない。本当の大切さって、こだまするのです。

「大切なものは、目に見えない」——このあまりにも知られたフレーズの持つ意味に、『星の王子さま』全体を精読しながら、またどんどん脇道にそれながら、自分にとって切実なこととして向きあうこと。そんな時間を彼らと共有できたことが、私自身にとっても、大切で、特別で、かけがえなく思えます。



## 『はじめてのつり』

ジェームズたちは、朝ごはんを食べながらテレビを見ていました。見ていたテレビが終わったのでお父さんがつりの番組にかえました。しばらく見ていると、ジェームズが「お父さんつり楽しそうだね。」と言いました。そしたら今度は、お父さんが「じゃあ、つりに行くか。」と聞きました。二人は、声をそろえて「行く！！」と言いました。お母さんが「あなたは、つりざおを持っていないでしょ。」「心配するな。行くと中で買って行く。」と言いました。まず車でつり道具屋に行きました。ジェームズのつりざおは、青で、ジャクソンのつりざおは、緑でした。その後首都のマルコ市を出てとなりのゲッペル市に行きました。ゲッペル市は、しぜんがゆたかでした。実の事を言うとマルコ市とザンドル市以外は、どいなかでした。ジェームズたちは、小川でつりをはじめました。三十分、一時間と、どんどん時間は、過ぎていくなか魚は、いっこうにつれません。二時間くらいたったころジェームズとジャクソンが同時に「魚がかかった！！」とさげびました。次のしゅんかん、なんとジェームズが魚にひっばられて小川にしずんでいくではありませんか。ジャクソンが「つれた！！」とさげびました。なんとつれたのは、つりざおを持ったジェームズだったのです。二人は、声をそろえて「えー！！」とさげびました。ジェームズが言いました。「服がぬれて気持ち悪いから家に帰りたい。」と言いました。けっきょくその日は、何もつれませんでした。

これは、T君の作ってくれた物語の中でも、おそらく本人も認める快心の作品です。

書き出しの「お父さんつり楽しそうだね」という子供の台詞は、単に自分が行きたいという気持ちを表しただけでなく、お父さんの気持ちの代弁でもあります。そしてお父さんの側も、単に乗りが良いだけでなく、子供の願いを聞き容れたいという思いがあるからこそ、「じゃあ、つりに行くか」という展開になっています。

そこには「行間」の会話があります。それは、お互いの気持ちを汲み合う幸せな家族のそれであり、テレビの前から立ち上がるのは、子供たちにとって「嬉しいお父さん」の姿です。

「あなたは、つりざおを持っていないでしょ」という、いかにもお母さんらしい合いの手に、「心配するな」と大見得を切るのも、またお父さんらしいです。そのあたりの会話が実に生き生きとしています。おそらくT君のしている日常から切り取られた一シーンなのでしょう。それをいつものようにT君が口頭で伝えてくれるのであれば、それは日常会話に終わりますが、現に「書いてくれた」ことで、このように普遍性を増したという点が重要だと思います。

また後半の物語の展開も見事です。いっこうに魚がかからないジェームズが「やっと釣れた！」と思った手ごたえは、実はジャクソンだったという、『はじめてのつり』の喜びと落胆とが面白おかしく読者の想像力を刺激します。しかし、それだけではありません。ジャクソンを助けるという筋が「同時」に解決されていることもまた、読者に安堵を与えます。

そのようなドラマチックな筋立ては、推敲のたまものであり、時間をかけて書いてくれたT君には、惜しめない贅辞として「すごいね」という言葉をおくりたいです。また、さらなる次回作が楽しみです。

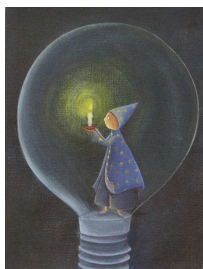
さて、ここでは、紙面の都合でT君の作品のみを取り上げましたが、もちろん他の生徒たち、Hちゃんも、Mちゃんも、Sちゃんも、R君もまた、それぞれに別の物語を書き残してくれています。どれも読み応えのある、そしてコメントの仕甲斐のある作品ばかりです。それについては、山の学校のブログに掲載する予定ですので、ぜひまたそちらをご覧ください。一年間に書いてくれた作品は、いつか思い出の一部となることを願って、学期の終わりに一つの冊子にして、また私がパソコンで打ったデータはメディアに焼いて、お渡ししようと思います。どうか今のお話作りが、彼らの古典となってくれますように。



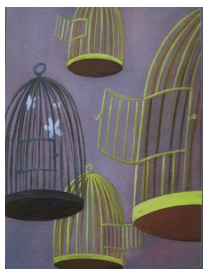
I



II



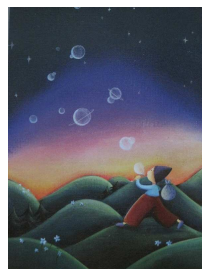
III



IV



V



VI

さて、今学期の授業のスタイルは、前半に本読みをした後に、後半にお話作りと想像ゲームを交互にするというものでした。本読みは、今では『長くつしたのピッピ』を読んでいます。以前紹介した『マガーク探偵団』と同様に、子供たちの活躍が大人のそれと変わらずに描かれているところに注目して選びました。

また想像ゲームとは、秋学期からはじめた新しい取り組みです。『Dixit』（ラテン語で「彼は言った」の意）という、「絵柄を見て想像し、物語る」というもので、お話作りの導入として取り入れました。自分が語り手になる順番は、「ぼくやる！」と言う人にも、「恥ずかしい…」と思う人にも、公平に回ってきます。そのように楽しみながら実は有無を言わせないところが、ゲーム（ルールを持った取り組み）の良いところでもあります。

語り手は、最初のうちは一文からスタートし、やがて三つ四つと文とつなげることに挑戦していきました。一方、それを聞く側は、自分の手札から、話された内容に相応しい絵を選び、語り手に渡します。語り手は、オリジナルの札をその中に混ぜ合わせてから、みんなの前に広げます。「さて、彼が言ったところの、本物の絵はどれでしょうか？」と問いかけ、それらの絵に投票してもらいます。もし一人も本物を選んでくれなかったり、あるいは全員にそれと見破られてしまったら、語り手の負けで、それ以外の場合は語り手に得点が入ります。また違う絵に入った得票は、本物に近い絵を選んだということで、それも得点になります。

けれども何と言ってもこのゲームの醍醐味は、やはり「自分が語り手になる」ことです。以下のものは、生徒がゲームの間に即興で作ってくれたお話です。みなさんはその内容に相応しいものが、先のページの何番の絵であるかを、見事当てられますか？（絵も生徒たちが選んだものです）

「ここはどこだろう。いやだなあ。早く抜け出したいよ。だって、ぼく・私は一人ぼっちだったから。ぼく・私は仲間が来るのを待っている。というのも、ぼく・私はスパイだったから。私はつかまって、今ここにとじこめられている。」

最後に一つ、これまた面白い展開があります。それは今となつては、『Dixit』よりも（作文用紙に書く）『お話作り』の方が楽しい！」と生徒たちが言ってくれるようになったことです。それはむしろ嬉しいことであり、最良の敬意として、子供とはシンプルな存在だと思わされます。その意味では、お話作りのために導入したこの『Dixit』は早くも役目を終えたと言えるでしょう。それはそれで「彼は言った」冥利に尽きるというものです。

（文責 福西亮馬）

## 『ことば』 5年生（金曜1限） 担当 高木 彬

このクラスでは、物語を読み、また物語を創作しています。今年はHちゃんとのマンツーマンでした。

物語を読むほうでは、斉藤洋さんの長編小説が、Hちゃんのお気に入りです。毎週1章ずつ読み、内容について話し合ってきました。『どうぶつえんのいっしゅうかん』（講談社）と、『おまえだ！とカピバラはいった』（講談社）。1章ずつですが、振り返ってみれば、この1年間で長編を2冊も読破したことになります。

物語を創作するほうでは、Hちゃんは『星の王子さま』という小説を書いています。秋学期、あるいは春学期の『山びこ通信』のこのクラスの記事をご覧ください。すでに『星の王子さま』という名前でお気づきでしょう。そう、Hちゃんは1年間を通じて、一つの物語を書き続けているのです！400字詰め原稿用紙でかれこれ70枚近く書いているのでしょうか。もちろん、たくさん書いているからすごいというわけではありません。たくさん書いただけなら、何も考えずにでたらめを書いておけばよいのです。長ければいい、短ければいけないという問題ではない。そうではなく、きちんとストーリーを練り、一つひとつの場面を丁寧に描写し続ける、継続の根気がすごいのです。一つのことだけにこれだけ情熱をもって打ち込めることがすごいのです。なかなかできることではない。あるときHちゃんは、自分がこれまで書いてきた原稿用紙の束を見て、「こんなに書いてるのって、すごいと思う」と言ってくれたことがあります。自信に思っていると思います。しかも、これだけ長い物語でありながら、Hちゃんの頭のなかで、もう結末は完成しています（私は聞かせてもらいましたが、ここでは内緒！）。この記事を書いている現在、Hちゃんの執筆は山場に差し掛かっています。「3月には完成させたい」と言っていますが、あせることはないと思います。さらに、そうして書きながらも、ときどき、次の物語ではこんなことを書きたいという構想を語ってくれることさえあります（すでにタイトルも決まっていますが、それも内緒！）。目の前のにんじんのためではない。彼女は物語を書けることを誇りに思い、純粋に楽しんでいる。そうした姿を見ていると、とても清々しい気持ちになります。

「これ、すごい傑作になるやろうな！」とHちゃんが言ってくれたとき、文章を書くことに自信が持てるのは良いことだなと思いました。なぜなら、どんな分野の根っこにも、書くことがあるからです。一度、「Hちゃんって書くことが好きやんな」と問いかけてみたことがあります。すると彼女は、「時間を気にせずどこまでも書けるから、山の学校で書くのが好き」と言ってくれました。こうして一生懸命に物語を書き続けた日々は、きっと彼女がこれから生きていく上での大きな財産になるはず。書いた本は、ぜひ5年、10年、20年と残しておいてほしい。もしもこの先、自分で自分をだめだと思ってしまうことがあっても、この『星の王子さま』のページを開けば、かならず過去の自分が励ましてくれるはずだから。

（文責 高木 彬）

# 『ことば』 6年生(木曜1限) 担当 福西亮馬

「行くも帰るもって、誰の歌やったっけ…? あ、そうそう! 蟬丸! この間、家族で滋賀県にある鰻屋さんに行った時に、お店の近くに石碑があって、その歌が書いてあったの」

と、いつか私にそう教えてくれたのは、Mちゃんでした。逢坂の関の近くにある「かねよ」という鰻屋だそうです。そのような嬉々としたMちゃんの報告を受けた時、私はこのクラスで『百人一首』に取り組んできて、心から「よかった」という思いがしました。

私自身、小学生・中学生の頃を振り返ると、百人一首とは、ただ「憶えるもの」という位置付けぐらいでしかありませんでした。そして、逢坂(あふさか)とはきっと大阪(おおさか)の別名だろう、ぐらいの浅い付き合いでしかありませんでした。(そして京滋の県境にあるということも、ずっと後になってから知りました)。そのような私ですから、Mちゃんがそれを教えてくれるまでは、この歌はただ「行くも帰るも」と「知るも知らぬも」のリズムが面白い歌というだけでした。けれども、そこに長い間お店を構えている人たちのことが想像されるなり、この歌がじわじわと私の「一部分」に浸透していくと感じ取りました。Mちゃんに至っては一入のことでしょう。今でも上りと下りという言葉がありますが、「行くも帰るも」というその歌は、関を越える人の思いがそれぞれであることと、そうした人たちが無言で同じ会釈を交わして通り過ぎていくという、今も昔と変わらない百代の過客の様子を私たちに彷彿とさせてくれます。

さて、百人一首に詠まれた「逢坂」は、清少納言の「よに逢坂の関は許さじ」と、三条右大臣の「逢坂山のさねかざら」があります。したがって複数「あふさか」と詠まれる機会があります。Mちゃんはそのたびに不思議な面持ちがするそうですが、きっとそれは素晴らしい何かの「予感」だろうと思います。私はどれとどれがそうだとあまり言わないことにして、ただ三つあるとだけ言うようにしているのですが、それはMちゃんならきっと自分で見つけて取り込んでくれるものと信じているからです。このクラスであと何度、「あふさか」と詠めるのかと思うと、一抹の寂しさもあり、かつ思い出してくれる日が待ち遠しくもあります。

一方、このクラスの百人一首の火付け人でもあるEちゃんは、何と言ってもそれに対する思い入れが強く、カルタ博士だと言っても過言ではありません。以前、私は山びこ通信に「一首覚えれば十首覚えたも同じ」と書きましたが、今ではEちゃんが覚えたそれは、もう半分近くにもなります。しかもEちゃんの覚え方は独特で、決まって「友達になろう」という方法です。学校で一回だけ遊んで「ドキドキ」した子の家に初めて行くような感覚で、「この子と友達になろう」と思った歌のところへ何度も何度も遊びに行き、覚えていきます。そして、いつしか親友の間柄まで輪を広げていくのです。友達になれば、あだ名で呼ぶこともあります。「夜はもえ」と言えば「昼は消えつつ」、「さしも草」と言えば「さしもしらじな」。よを「うちやま君」。「はげ」しかれとは(笑)。などなど。また「奥山に」と言えば「私の家も鹿の声が聞こえるから、分かるわ」と、ご近所同士の札まであります。そのように、新しい歌と友達になることに余念がありません。そのことは、ちょうど二年前に、「一枚だけでいいから覚えてこよう」と言って宿題を出し、Eちゃんが選んでくれた「いまひとたびのみゆきまなたむ」が、これほどにも大きく育つとは、思いがけないことです。

Eちゃんは朝学習のノートにも百人一首のことを書き連ねていて、それが二冊目になりました。私も何度か見せてもらいましたが、「このノートは大事なものだから、もしいつか引越しても、捨てずに持っていてほしい」と頼むと、「大丈夫。お嫁に行く時も持っていくから」と請合ってくれました。「学校のクラブでも、カルタ部が作りたかったのに」と言っているほどです。そしてその思いの丈はどこにぶつけられたかと言うと、卒業文集の「私の一字」(漢字)を選ぶ際に、「首」と書いたそうでした。何も知らない人ならば、それを見て「ん?」と首を傾げるかもしれませんが、「百人一首」のことであると知っている私たちには、それが「お互いの合言葉」と認識され、思わず笑みが交わされたのでした。

(文責 福西亮馬)



(蟬丸神社の石碑)

# 『かず』 1~2年、3年B、4年A・B、5年(火1)(水1・2)(金2)(火2) 担当 福西亮馬

「どうして小数なんかが出てくるの?」——これは5年生のHちゃんからの質問です。私は、学校で小数を習うことの意義について質問されたのかと思い、うーんとその場で考え込んだのですが、しかしすぐその後、質問の意味を取り違えていることに気がきました。

それは「割合」の問題で  $75 \div 50$  という計算をしている時のことでした。Hちゃんは、75と50という二つの数が整数であるのに、どうして答には小数が出てくるのか、という点に疑問を持ったのです。そしてそれを説明する段階になって、いよいよ私も「これはパズルのようだぞ」と腕組みしたのでした。

私がある時たどり着いたのは、「数の相性」という説明でした。50にとって「相性のいい数」とは、切りがいい数、すなわち50、100、150といった「倍数」の関係にある数のことです。この間、Hちゃんが分数の計算を通して、倍数が得意になってくれたことを思い出しながら、次のようにホワイトボードに式を並べました。

$$75 > \begin{matrix} 50 \div 50 = 1 \\ 100 \div 50 = 2 \\ 150 \div 50 = 3 \\ \vdots \end{matrix} < ?$$

さらに式の間に 75 を付け加え、「ほら、中途半端」と言って、1 と 2 の「間」に注目しました。そして二つの数の「相性」が中途半端だから、出てくる答も中途半端になるのだと説明しました。「ほら、合わない人っているでしょ？ どちらも『まとも』だけれど、いがみ合っていたら…」と、実際にはあれこれ比喩を駆使したのですが、紙面に載せるにはあまり適切でない表現も含まれていたの（笑）、ここでは割愛します。ただ H ちゃんが笑ってそれに納得してくれた、ということだけをお伝えしておきます。このように私もまた授業では「パズルを解く」必要があるのです。

さて、いつもならば、クラスごとに分けて、生徒たちの様子を記事にするところですが、今回は、すべてのクラスを通しての私の所信を書こうと思います。

私がクラスで一番多くしていることは何かというと、それは「ほめる」ことです。ただし私は生徒たちに、他人と比較して自分の居場所を見つけるような人にはなってほしくないと考えています。むしろ、他人がどうあれ自分のすべきことは自分です、そのような人になってほしいという思いで、ドリルやプリント、パズルの問題を渡しています。それに丸をつける時でも、「すごいね」と私が言うのは、何も解けたことに対するご褒美ではなく、生徒自身に個々に賞賛の言葉を送りたいからです。ましてや誰かと誰かの間に優劣をつけて「席を並べたい」がためではありません。それは、山の学校に通知簿がないこととも符合します。

勉強をすると、以前の自分から「変わる」ことができます。私がほめたいのは、そのことです。それには、自分に対して「間違い探し」ができる余裕が必要です。それを持つことは、実際に大人でも難しいことです。ゆえに、もし大人でも難しいようなことが今仮にできているのだとすれば、他人と比較して焦る必要は「全くない」と考えられます。一体そのどこに不安があるのでしょうか。もしあるとすれば、それは「他者との比較」が忍び込んでいることが原因だと私は考えます。

勉強とは、偏見を剥ぎ取ることで視野を広げ、より自由になっていく行為です。もしそこで他者への優越感を手に入れるのであれば、それは真逆に行くことです。それは至って不自由なことであり、いつかは「上には上がいる」ことに愕然として窮してしまうことでしょう。すなわち、「比較」によって「やる気」を出してもらうことは刺激が強だけに危険であり、後になって生徒がその時の喜んでいた自分の姿を思い出して、たちまち勉強自体への興味が「色あせる」ことの方を、むしろ私は恐れます。『チョコレート戦争』の金泉堂のお菓子のように「本人がそのあとに約束されたご褒美を手に入れることにやる気をなくせば、それまで」という方式で、いつまでも引っぱることは、あまり適切ではないと感じています。それは「後からネガティブになる思い出」かもしれない、それを作るよりは、過去の自分と向き合って克服したその時の本人の頑張りや、『桃太郎』のきびだんごのように「一つでも二つでも持たせてあげたい」というのが、私の思いです。なぜなら自分との付き合いは永続的であり、それさえを「自信」に持っていれば、算数に限らず、何においても踏ん張りがきくものと信じられるからです。前号でお伝えした『論理パズル』も、そうした「自分を信じる」経験を増やすのです。自分で一から答案を作り上げる。これが「自信」の源になれば、およそ「考えること」が本質である数学は問題ありません。それは彼らの頼もしい答案が何よりも説得的に物語っています。

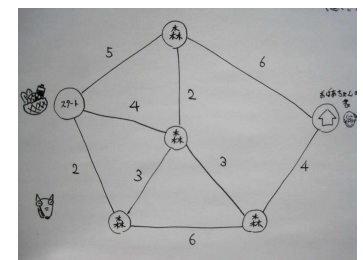
繰り返しになりますが、「他人との比較ではなく、自分との比較」が勉強の本質です。自分を味方につけることができた人は、何にでも勝負ができると言えます。一方、他者と比較して得られる自信は、所詮、『白雪姫』の鏡による「偽りの自分」でしかありません。

そこで、私がクラスで一体何に取り組めばよいかと考え、行き当たった一つの答が、「パズル」でした。パズルは「自分は間違っていない」という前提に立っているとなかなか解決に至らずに、結果、自分が悔しい思いをします。それでも粘り通したくなるのが、パズルのよさです。問題形式自体はおおよそ現実離れしていますし、一瞬は他人の「解けた！」という声が気になるかもしれませんが、パズルそれ自身の中に解く楽しみがあるので（つまり自分が解けたかどうかにかかわらず意味がないので）、人と比べる必要は本来はあまりありません。

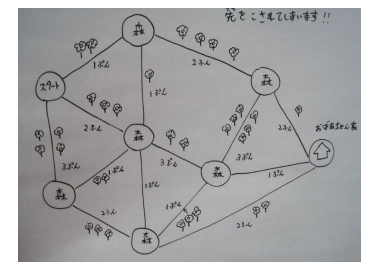
発展的なことへの興味はもちろん無理に抑える必要はありません。ですが、ただそれを学課の延長に求めて「興味が先細りする」ことを心配するよりも、全く次元の異なるところで勝負するパズルで、やわらかい好奇心は受けとめた方が、むしろ自然なことだと考えるようになったのです。そして当然のことながら、パズルは算数の根幹である「考えること」を鍛えます。

最後になりますが、以前、1~3年生のクラスで「最短距離問題」（右図）をしました。その時、「本当にその答が一番短いですか？」と質問すると、いつまでも「うーん」と自分の答が最短かどうかで頭をひねっている生徒たちがいました。私はそれが「本当の勉強の姿」だと感じました。こちらが答を教えるのではなく、また隣の答がそうだからではなく、自分に確固とした根拠があることを信じて「そうだ」と言える人にこそ、はじめて「正解」の価値があります。

いつもならクラスの様子を書くところですが、一度私の考え自体もいつかは述べなくてはと思い、この場を借りて書かせていただきました。



（第1問：オオカミは森のことをよく知っているので最短でおばあさんの家に着きます。1分でも遅いと…）



（第2問：オオカミは10分で到着。その間にお花をできるだけ摘んで、おばあさんの家に着いてください）

（文責 福西亮馬）

## 『かず』 3年生A(金曜2限)

担当 高木 彬

「かず」と言えば、まずは紙の上に書かれた数字のことを思い浮かべます。でも、「かぞえる」という動詞になると、まず思い浮かべるのは、具体的な物のことではないでしょうか。

幼い頃、よく祖母につれられて家の前の道路まで行き、そこで何時間も過ごしたものです。なにをしているのか。車を「かぞえる」のです。目の前を通り過ぎていく車を、1、2、3……とかぞえていく。それだけ。でも、ただそれだけのことが、無性に楽しかった記憶があります。道を歩けばガードレールの柱をかぞえ、横断歩道を渡れば白線をかぞえた。それだけで気分が良かったのです。みなさんも幼い頃、これに似た体験をお持ちではないでしょうか。どうしてあんなにわくわくしたのか、少なくとも私には、いまだによくわかりません。でもひとつ言えることは、そうしてかぞえたことは、それから20年以上を経た今になっても、よく覚えているということです。たぶん、目に見えない概念ではなく、物を相手にしていたからではないか、そんなふうに思えます。

その後、物を「かぞえる」ことよりも紙の上の「かず」を操作することのほうが増えても、あいかわらず「かず」を身近に感じることはできたのは、こうした体験が初めにあったからだろうと思います。「かず」からどんどん色や形が抜け落ちて、普遍的な真理へと純化されていっても、それは日常から乖離した遠い世界のものではなく、やはり自分の日常とつながっている。そう思えたのは、たとえば根っこにこんな思い出があったからです。

このクラスでは、「ドリル」や「パズル」にも取り組んでいます。これらについては春学期の『山びこ通信』の記事をご参照ください。その一方で、「かずの探求」という取り組みを1年間つづけてきたのは、こうした「かず」の体温を感じる体験をしてほしいという思いからです。それも、「かず」が記号的操作の領域へ移りつつある今の時期にこそ、こうした体験は貴重になってくる。そう私は確信しています。

前号の『山びこ通信』でも書きましたが、「かずの探求」とは、今週は「17」、来週は「18」というように、毎週1つずつ「かず」をとりあげて、それに関するものを見つけていくという取り組みです。それぞれの「かず」には、とりあえずの担当を決めておきます。すると、たとえば「12」の担当になったら、次の発表の番がまわってくるまで、普段の生活の中で、頭の片すみにも「12」があるという状態になります。ふとしたときに身の回りのものをかぞえることになる。Iちゃんは、十二支の「亥(いのしし)」、色鉛筆の「12色」、「時計一回り」、12月の「クリスマス」、「おおみそか」、「冬休み」と、まずは発見してくれています。でもそこに、「野球のスタンドのライトのかず」が交じっているのが面白かった。ここでIちゃんが「野球のスタンドのライト」と言っているのは、ナイターなどで点灯する、あの照明塔のことです。そこに12個のライトがはまっているということ、Iちゃんは発見したのでした。「かぞえたら12こあった!」この発見は、野球観戦が好きなIちゃんならではのものでしょう(「22」の回では、「阪神タイガースの藤川とう手のせばん号」と、「日本ハムの中田せんしゅのせ番号」を挙げてくれました)。またHちゃんは「8」の回に、自分でいろいろなものをかぞえた結果、「わたしのふでばこに入っているえんぴつのかず」と、自分の「みょうじをひらがなでかいた(画)数」が、どちらも「8」であることを見つけました。Moちゃんが「23」を担当したときも、「自分の名まえをかん字でかいたかく数」が「23」画であることを発見してくれました。「24」では、Miちゃんが、私が以前自作した復習プリントのマッチ棒パズルの本数が「24」本だったと言ってくれました。自分が見つけた「24」のなかでは「これがいちばん好き!」らしいのですが、それは、自分でかぞえて発見したときの喜びが大きかったからでしょう。この取り組みで目指したのは、そうした、自分にとって身近なところから「かず」との特別なつながりを体験することです。このまま30、40と、ぜひ続けてほしいと思います。

これは気の長い取り組みです。でも思い起こせば、あのとき祖母は、車をかぞえつづける私を、なにも言わずにずっと待っていてくれたのでした。もちろん、当時の私はそんなことを考えもしません。車をかぞえることに夢中なので。しかし祖母は、けっして「そんな無意味なことをするな」とは言いませんでした。ただ、私がかぞえつづけるのを、じっと見守ってくれていました。

(文責 高木 彬)

## 『かず』 6年生(水曜3限)

担当 岸本 廣大

このクラスでは、ドリルを中心に小数と分数の計算に取り組んでいます。計算して丸付け、間違えがあれば直していく。それを一問ずつ積み重ね、生徒さんは1月末にドリルを一冊終わらせてくれました。そのドリルは11月から取り組みはじめたので、三カ月足らずで解き終えたこととなります。前回よりもスピードアップしたことは、まちがいなく成長の証です。

このようにドリルに取り組むこのクラスでは、必然的に「問題を解く」、「丸付けをする」ことに多くの時間が割かれますが、それら以外にもう一つ、かなりの時間が費やされる行為があります。それは「待つ」という行為です。生徒さんが問題を解く間、私はそれを監督しながら「待つ」ていますし、逆に私が生徒さんの答えを確認している間、生徒さんはその結果を「待つ」ています。つまり、このクラスは誰かが「常に待



っているクラス」といえるでしょう。ただし、「待つ」といっても、ただ何も考えずに待ちぼうけているわけではありません。そこには、私(先生)と生徒さんの間にある種の交流があったのだと、私は感じました。この交流について、山びこ通信でお伝えさせていただきます。

まず、生徒さんが問題を解いているのを「待つ」私は、生徒さんがどのように問題を解いているのかを観察しています。答えは当たっているが、その解き方で大丈夫なのか。もっと効率の良い方法もあるのではないか。間違いがあったが、その原因は何か。「待つ」間に考えておくことで、丸付けの後の指導がスムーズになります。また、根本的な勘違い(例えば、約分するとき分母と分子を異なる数字で割ってしまう)があった場合には、そのページを全て解き終わってなくても、その場で生徒さんに確認をするということもあります。これによって、ページ全体を同じミスで解きなおすという手間を省き、生徒さんのやる気をそがないようにするのです。つまり、私は、「待つ」間に生徒さんの思考をたどり、ときに問いかけているのです。逆に、私の丸付けの結果を「待つ」生徒さんも、私が感じた限り、気を緩めきっているようには見えませんでした。目線は常に私の手元に向けられ、その手が丸を描かない時には、「なぜなのだろう」と首をかしげているようでした。つまり、生徒さんも「待つ」間に頭の中で私に対して疑問を投げかけているのです。

「待つ」間、両者はたいてい無言であり、一見交流は無いように見えますが、互いに思考の中で相手へ語りかけているという点では、間接的ながら、交流はあったといえるでしょう。「待つ」中で生じる交流というものを知ることができたのは、このクラスを担当して私が学んだことの一つでもあります。さらに、その交流は丸付け後の指導という直接の交流にもつながっています。間接的な交流から直接的な交流に連続しているという意味で、この「常に待っているクラス」は、先生と生徒の間で「常に交流のあるクラス」ともいえるのではないのでしょうか。

(文責 岸本廣大)

## —「イベント」—

### 『将棋道場』(月曜 16:00~18:00) 担当 百木 漠



将棋界では先日、コンピューター将棋がとうとう男性プロ棋士に勝ったということがニュースになりました。しかも負けたのは元名人の米長邦雄永世棋聖(かつてとても強かった人)です。2年前に清水市代女流王将(女流棋士では最強レベル)にコンピューターが勝ったことも話題になりましたが、今回の勝利はいよいよコンピューターが人間に完全勝利する日が近づいていることを将棋ファンに実感させることとなりました。来年には、5種類のコンピューター将棋と男性プロ棋士5人が戦う団体戦が企画されているそうで、こちらも面白くなりそうです。

山の学校の将棋道場もなかなか盛り上がっています。1月の将棋道場は、初参加の3人を含めて約20名が参加してくれました。また昨日は年長さん組のお母さん方も数名来て下さり、山の学校は大変にぎやかでした。2年前の将棋小学生名人戦で準優勝したTaくんも飛び込みで参加してくれて、早速いま将棋道場で一番強いであろうRiくんと対戦していました。将棋道場ではほとんど負け知らずのRiくんにとっても良い経験になったのではないかと思います。RiくんはTaくんに二枚落で勝ち、飛車落ちで負けていましたが、大したものです。中務先生とも平手で対戦して一勝一敗だったそうなので、いよいよ初段くらいの実力はありそうです。

将棋道場二番手のKaくんは昇級試験として私(百木)と六枚落ちで対戦。二回チャンスをあげたのですが、一回目はあっさりとKaくんの負け。二回目は端攻めが成功して、危うく詰まされかけましたが、最後の最後で寄せが甘く、時間切れで引き分けとなりました。六枚落ちは、端攻めが成功したとしても、上級者相手に最後まで寄せきるのが大変なのです。このあたりは次回までにさらに実力を磨いてきてほしいところです。

最近続けて通ってくれているFuちゃんとJuくんは、それぞれ3連勝/4連勝して、7級と6級に昇級しました。二人ともおとなしいですが、毎回集中して将棋に取り組んでくれており、その地道な姿勢が昇級につながったのだと思います。これからもこの調子で将棋道場の強豪仲間入りを果たしてくれれば嬉しいです。5級のKoくんは6連勝したので、次回昇級をかけて先生と六枚落ちで対戦です。5級から4級へ昇級するのはなかなか大変かもしれません。長い間通ってくれているSoくんやMiくんも5級までは順調にきたのですが、ここで足踏みが続いています。7、8級の子たちに駒落ちで勝つのも大変だし、3、4級の上級者相手に勝つのも大変だからです。6連勝してからも先生に六枚落ちで勝つという大勝負もあります。ぜひこれらの壁を乗り越えて、さらに実力アップしてほしいところです。

将棋道場では、毎回少しのあいだ時間をとって将棋のワンポイント解説をしているのですが、12月と1月は終盤の解説をしました。将棋は何よりも相手の王様を詰ませることが目標なので、終盤にはいかに相手の王様を寄せにいくかという意識を強くもたねばなりません。そのためには、相手の王様近くの金銀を攻めるのが良いです。一枚ずつ相手の金銀を剥がして攻めていくと分かりやすいでしょう。序盤～中盤が強くなってきた子は多いので、さらに終盤の力も磨いて強くなってくれればと考えています。



(文責 百木 漠)

——「中学生・高校生」の部——

## 『中学・日本語の読み書き』(火曜3限) 担当 岸本廣大

この冬学期は、漢字や熟語、ことわざに関するクイズを解いて語彙力を養いつつ、秋学期からひきつづき読み進めている『人間失格』に取り組んでいます。この山びこ通信を執筆している段階では、主人公である葉蔵が睡眠薬による自殺未遂を犯したところを終え、もうすぐ読み終わる予定です。終盤に至り、物語の全容や主人公の行く末もほとんど明らかになってきているのですが、やはりというべきでしょうか(一応、生徒さんの要望を参考に選んだ作品ではあるのですが)、生徒さんにとっては決して「面白い」本ではなかったようです。生徒さんが自ら進んで読むという本を尋ねると、ミステリーが挙がりました。あくまでもこのクラスの生徒さんを担当した私の推測ですが、中学生にとって「面白い」本とは、「物語の展開が面白い」本なのでしょう。なるほど、『人間失格』の話の展開は、主人公の葉蔵が自らの性格ゆえに墮落していくというもので、決してメリハリがあるものとは言えません。生徒さんが「面白い」と感じなかったのは無理もないでしょう。

しかし一方で、『人間失格』が名作として長く読み継がれているのもまた事実です。とすれば、別の「面白さ」が『人間失格』にはあるのです。ありきたりな言葉ですが、それは主人公の「心情描写」だと、私は考えています。世間に対する不安や恐怖、他人を理解できない焦り、原因はわかっているにもかかわらずどうにもできない無力感。終盤の葉蔵と同年代の私は、彼のその心情にとっても共感できるのです。しかし、中学生の生徒さんにとっては「未知の世界」の話であるため、その「心情描写」が暗く狂気じみた言語の羅列とみなされてしまうのではないのでしょうか。

そのように考えたとき、私に一つの読書体験がよみがえります。中学生のころ、比較的本を読んだ私は、ヘルマン・ヘッセの『車輪の下』に手を伸ばしました。何故その本だったのか、今では思い出せませんが、名作なるものに挑戦してみようと思っただけで、『車輪の下』を選んだのは偶然だったのでしょうか。しかし、記憶にあるのは、主人公ハンスが大事な口頭試問でギリシア語の変化形を答えられずに焦り、土壇場でなんとか答えられたという場面と、終始暗い調子の学校生活という印象だけです。正直に告白しましょう。当時の私はそれを最後まで読み切ることができませんでした。当時は「面白い」とは思えなかったのでしょうか。私だって中学生のころは、生徒さんと大差なかったのです。いいえ、『人間失格』という名作を読み切れるであろう生徒さんの方が、むしろ先を進んでいます。

私は、このクラスで『人間失格』を読み、生徒さんの反応に触れたことで、『車輪の下』の名作たる所以をおぼろげながら認識させられました。時間があるときに、再読したいと思います。願わくは、生徒さんも、今は「面白い」と感じなかった『人間失格』を数年後に読んでくれればと思います。今度はきっと「面白い」かもしれませんから。

なお、テキストは「青空文庫」(<http://www.aozora.gr.jp/index.html>)を利用しました。この場を借りて、お礼申し上げます。

(文責 岸本廣大)

冬学期、このクラスでは、秋学期からひきつづき、西洋近代史を生徒さんと議論しています。西洋近代史については、多くの方が学校で学ばれたと思いますが、「日本に住む私たちがなぜ他国の歴史を学ぶのか」と疑問を抱いた方はきっと少なくないでしょう。そこで、今号の山びこ通信では、クラスの取り組みに絡めて、その疑問について考えてみましょう。

クラスの議論では、西洋近代の歴史を現代の出来事と比べることが多くありました。例えば、産業革命を経たイギリスの自由貿易主義、それに遅れたヨーロッパ各国の反応は、つい最近までニュースを騒がせていた TPP（環太平洋パートナーシップ協定）の議論との比較で議論が進みました。現代とのこうした比較がしやすいのは、西洋近代が現代の世界全体に大きな影響を与えたからです。今の日本では意識すらしないかもしれませんが、自由や平等といった「基本的人権」、国家を動かす「議会政治」、そして日本という「国家」も、その原理は西洋近代で成立しました。つまり、現代世界の成り立ちや現状を理解するのに、西洋近代史は欠かせないのです。とすれば、ヨーロッパではないですが、日本も西洋近代の一部とみなせるでしょう。

ただし、ヨーロッパ以外の地域が完全に「西洋化」したわけでもありません。それらの地域に対する西洋近代の影響は、確かに無視できるものではありませんが、現地の要素が少なからず残った、または影響を受けずに維持され続けたのです。今の日本がその典型でしょう。西洋近代の影響の程度は地域によって様々ですが、それがいかほどであれ、ある地域の今を理解するには、西洋近代史だけでなく、その地域独自の歴史を合わせて学ぶ必要があるのです。

では、現代日本に暮らす私たちには、日本史と西洋近代史だけが必要なのでしょうか。私はそうは考えません。以上で縷々述べてきた意義を持つ西洋近代史、そして地域の歴史である日本史は、いわゆる「自分を知らずして知るための歴史」です。「自分」を知ることはもちろん大事ですが、整備された交通網によって世界中のどこへでも行くことができ、インターネットの普及により地球の裏側とも瞬時にコミュニケーションがとれる現代において、「自分」とは異なる地域や文化の「他者」と接する機会は、格段に増えています。そのような現代において、「自分」だけではなく、「他者」を理解することは必要不可欠です。だからこそ、地域そして時間さえも現代とは異なる「他者」の話（＝他国の歴史）は、現代の私たちにとって非常に重要になると私は考えています。それは、いわば「他者を知るための歴史」といえるでしょう。そして、「人のふり見て、わがふりなおせ」のごとく、「他者」の理解はひるがえって「自分」の理解にも返ってくるのです。

以上、クラスのテーマである西洋近代を中心に、他国の歴史を学ぶ意義について述べてきました。「自分」を見直したい方、「他者」を知りたい方、もちろん単に歴史を語りた方、ぜひこの歴史入門の戸を叩いてください。私ができる限りお相手させていただきます。

（文責 岸本廣大）

## 『中1～2年英語の基本』（火曜4限） 担当 岸本廣大

冬学期のこのクラスは、「リスニング」、「単語の確認」、「文法の復習」という三本柱で進めています。一見、何の変哲もない、当たり前の取り組みにみえますが、特に中学一年生にとって、それらは冬学期だからこそ効果的な取り組みになるのです。

春・秋学期のころは、新しい要素が次から次へと飛び出してきて、それについていくのがやっとだったはずですが。多くの中学生が学校以外でも学習にも追われていたことでしょう。このクラスでも、春・秋学期は基本的には学校でわからなかったことや定期テストの徹底的な見直し軸となることが多くありました。ただし、このように四苦八苦した生徒さんは、冬学期にはある程度英語に慣れ、自分なりの学習パターンを形成しているはずですが。毎週山の学校に上ってくる生徒さんなら、初めは上るのが大変だったけれども、次第にペース配分を体得し、楽に上れるようになった経験があるでしょう。それと同じなのです。最初は間違いの多かった「単語の確認」が、冬学期には比較的よくできていたのも、その成果の現れだだと思います。そして、この余裕があるからこそ、特にリスニングや文法の復習に効果的に取り組むことができるのです。

例えばリスニングの場合、入学当初や新たな文法用語が飛び交う春・秋学期のころに取り組んだとしても、自分が何をやっているのかわからなくなってやる気をそがれ、生徒さんによってはリスニングに対する苦手意識を持つかもしれません。しかし、余裕のできた冬学期には、リスニングで用いられた文がどのような種類のものか、大体わかるようになっているはずですが。もし一回で聴き取れないとしても、解説を加えた上で聴き直すという状態であれば、リスニングは決して苦にはならないでしょう。

これは文法にも言えることです。このクラスでは、確かに春学期から文法に力を入れてきましたが、それは必要最低限の原則を理解するというところに力点を置いていました。つまり、押し寄せる新たな知識に対

して、それをできるだけわかりやすく整理しただけなのです。しかし、実際の英語に取り組む際には、それらを応用して立ち向かわねばなりません。その単元で習ったときはわかっていたつもりでも、実際の問題を解いて成果が出ない場合は、その応用の訓練が欠けていることが原因だと考えられます。このクラスが、冬学期で取り組んでいる文法の復習とは、まさに応用の訓練なのです。

冬学期は、リスニング、単語、文法、それぞれの問題を解いている際に、生徒さんから「英語がわかるようになった」という声が聞こえるようになりました。そして実際に、その実感は成果としても現れているようです。春・秋学期に一生懸命に「剣」を鍛え上げたからこそ、冬学期にはその業物を使いこなす訓練ができ、実戦で役に立つのです。だからこそ、一年という長期的な視点からは、冬学期の復習こそが効果的であると私は考えています。

(文責 岸本廣大)

## 『中3英語の基本』(水曜3限)

担当 浅野直樹

中2英語として始まったこのクラスが中3英語となり、それもこの冬学期でおしまいです。振り返ると長いようで短い2年間でした。このクラスの生徒たちはもうすぐ中学校を卒業し、おそらくは高校生になります。もちろん高校生になってからも、そしてもっと言えば大学生になってからでも学生ではなくなってからでも、山の学校に来てくれるのは大歓迎ですが、中学校の卒業は一つの大きな区切りです。その区切りまでにどのような英語の力を身につけておいてもらいたいかを以下に書きます。

日本の中学校での英語教育で目標とされていることは一通りの英語の規則の習得だと言えます。簡単なあいさつや"I am a student."から始まり、中学3年生の最後には本格的な長文を読むこととなります。高校でまったく新しく習う文法事項は仮定法くらいなので、中学校で習ったことを理解すれば、原理的には辞書を用いてたいの英文を読むことができるようになります。

そこに至るまでの最大の難所は中学3年生の後半に習う関係代名詞です。日本語にはない発想であることに加え、関係代名詞の省略や分詞による修飾なども含めるとパターン数も多いので、一時的な暗記でごまかすことはまずできません。主格と目的格とを区別しながら二つの文を一つの文にまとめるのだと考えるのが根本的な理解ですが、高校を卒業した人でもその理解ができている人はそうたくさんいないほどの難所です。

関係代名詞の他はどれだけ多くの知識を持っているかということが問われます。具体的にはtoo ~ to doとso ~ that ... can't[couldn't]の書き替え、命令文+and/or、to不定詞の名詞的用法と動名詞との使い分けなどです。これらは数をこなせば意識せずともできるようになります。

こうした難所をクリアしてめでたく中学校での英文法を習得すればかなりの割合の英文を読むことができます。しかしそれはあくまでも「辞書を用いて」可能になる話です。もっと言うなら「辞書を正しく用いて」のみ可能になります。わからない語が多数あればいくら文法を理解できても太刀打ちできません。辞書が与えられてもそれを正しく用いるのは案外難しいものです。辞書に載っているどの意味を採るのか決めなければなりませんし、熟語として調べなければ意味が通らないこともしばしばです。そして辞書を正しく用いることができたとしても時間がかかります。こうなると英語を読むのが苦痛になります。

一つでも多くの語彙を習得するというのが中学英語での隠された目標です。自分の通っている中学校でたまたま使われている教科書の単語をすべて覚えたとしてもまだ不十分です。他の出版社の教科書には載っているという単語がありますし、どの中学校の教科書にも載っていないけれどもよく用いられる語もあります。このクラスの複数の生徒から、長文を読むには単語を知らなさすぎるとの感想が聞かれました。この時期に語彙という壁に突き当たっておくことは大事だと思います。

ここまではもっぱら英語を読むという場面を想定していました。それは日本の中学校での想定でもあります。このことについては賛否両論がありますが、日本での生活では英語を聞いたり書いたり話したりするよりも読む機会のほうが圧倒的に多いので、私自身は読解重視が悪いことではないと考えております。それでも少なくとも英語を聞いたり書いたり、ましてや話したりする練習をあまりしていないということを自覚しておく必要があります。リスニングが苦手だと悩む中学生にはしばしば出会いますが、あまり練習していないことをできるほうがそもそもおかしいのです。

最後にもう一つ重要なことがあります。それは言語に対する敏感さを養うことです。日本語と英語とでは使われている文字、文の構造、時制の表し方など大きく異なっています。そのため英語を直訳すると不自然な日本語になることが多々あります。日本語を直訳すると意味の通る英語にすらならないこともあります。そこから文化の違いに思いを馳せるのも結構なら、日本語を習得する際にも感じたであろう苦しさを想像するのも一興です。まとまった分量の英語を読む場合にも同じことが言えます。こちらの場合は相違点よりも共通点のほうが多いかもしれません。

中学英語で学んだこれらのことを今後さらに発展させてくれることを期待しています。

(文責 浅野直樹)

この冬学期には高校3年生の受講生とセンター試験の攻略に励みました。ブログでもそこで得られたコツを断片的に紹介してきました。その作業を通じて感覚が磨かれたおかげで、私自身今年の問題でようやく初めて満点を取ることができました。そこでこの『山びこ通信』を契機にセンター試験の英語の攻略法をまとめることを決意しました。

センター試験はほぼすべての問題が四択のマークシート形式で満点が200点なので、ランダムに回答するだけでも50点くらい取れることが期待されます。少し勉強すれば4割の80点、そこそこ英語ができる高校生で6割の120点、長文をしっかりと読めるようになると8割の160点が取れるといった感覚です。

過去問を解いて実があるのは6割くらい取れるようになってからです。最初のうちは制限時間を気にせず解いて問題に慣れることです。そして答え合わせでは表面的な点数を気にせず文法や単語の一つでも多く吸収することです。そうして7~8割できるようになると制限時間との勝負です。英文を左から右へと読めるようになれば速く読めます。例えば "I believe face-to-face communication is essential for young children to develop their speech." という英文なら、「私は信じる。対面のコミュニケーションが不可欠だと。幼い子どもにとって。発話を発達させるために。」といった具合に読みます。

最大のコツは楽しむことです。特に英文を読む問題は楽しめます。受動的に問題を解かされるのではなく、「へえ、そうなのか」といった感じで本文を読み進めるとよいです。楽しみながら読むならまず一気に本文を読み通すはずであり、先に問題に目を通してから本文を読んだり、問題と本文を行き来したりすることなどないはずで、興味を持って読めばどこにどのようなことが書いてあったかは記憶に残ります。問題を解くことを考えても結局はそのほうが近道になります。

ここからは設問別に記述します。

第一問の発音・アクセントは何となく解くしかないと思っている人が多いですが、実は対策をすることができます。発音問題で出題されるポイントは限られています。"th" を「ず」と読むか「ず」と読むかといった子音の識別は比較的簡単なので有名な語をまず押さええます。母音の違いは微妙ですが、"oa" は broad系の語以外は「オウ」と読むといった規則があります。アクセントではもっと明確な規則が存在します。その中でももっともよく使うのは "-ate" の2つ前にアクセントがあるという規則です。文の中でどの単語を強く読むかを考えるときは、新情報、対比、感情に注意します。

第二問の文法系の問題は一通りの文法事項を理解してから数多くの問題を解くとだいたいできるようになります。他の選択肢はなぜだめなのかなども考えながら、できる限り記憶ではなく理解に頼るようにします。語法や会話特有の表現は仕方ないと割り切って覚えるように努めます。

第三問英語そのものというよりも読解力を問う問題です。Aパートは受験生がまず知らないであろう語句に下線が引かれていて、その意味を前後の文脈から推測する問題です。Bパートでは茶髪は是か非かといったテーマについての数人の意見を読んで、それぞれの主張を要約している選択肢を選びます。Cパートは英文中の空所に入る語句を選ぶ問題です。どれも細部よりも要旨をつかむことが求められます。Cパートでは however などの接続語に着目すると解きやすいです。この第三問を素早くクリアできると楽です。

第四問は図表の読み取りです。ちょっとした計算を行うこともあるので、数字に強いと有利です。勘違いをして誤った選択肢に飛びつかないように冷静に理詰めをすることがポイントです。

第五問はここ数年状況把握問題になっています。微妙な細部に注目しなければならないこともあり、最も難しい問題だと思います。少し考えてわからなければとばして先に進むのがよいでしょう。

第六問は長文読解問題です。昔は小説と決まっていたいますが、最近は論説風の文章が多くなってきました。そうすると論理構成をつかむのが大事になります。段落構成を直接問う問題もよく出題されます。一般論を述べているのか具体例を述べているのか、結論→理由の順なのか、理由→結論の順なのかなどを考えます。first, second, third、あるいは another, finally などの語に注目して並列関係をつかみます。

リスニングは一朝一夕にできるようになるものではありませんが、センター試験に関してはその形式に慣れておくことをおすすめします。どのタイミングで選択肢に目を通すか、こういう話の展開ならこういう答えになることが多いといった感触をつかむためです。

読むだけで点数が劇的に上がることを期待していた方はここまで読んでがっかりしたことでしょう。しかし文構造が把握でき単語の意味がわかるという基礎があつてはじめてコツや攻略法などと言えるのです。センター試験を一つの目安として、真の英語の力を養成する一助となれば幸いです。

(文責 浅野直樹)

## 『高校英語』（月曜4限）

担当 百木 漠

Sくんと高校英語の授業は1月で無事に終了しました。Sくんが美大志望で、学科試験はセンター試験のみのためです。センター試験の直前には、特別に2コマ連続で授業をさせていただきました。Sくんは最後のほうはかなり調子を上げていたのですが、実際の出来がどうだったのかは今のところまだ報告を受けていません。点数はともかく、本人の実力を十分に発揮してくれていれば良いと思います。

絵の勉強や部活動や文化祭準備など、多忙な高校生活を送っていたSくんですが、さすがにセンター試験1ヶ月前は、センター対策に集中してこれまでにないほど勉強してくれていたようです。もともとSくんは飲み込みが早いので、集中して勉強すればそれだけきちんと実力は伸びます。人生のなかで今後これほど集中して勉強する機会もなかなかないかもしれません。とくに英単語については、最後の1ヶ月でかなり語彙力を増やしてくれていたのではないかと思います。試験までもう少し時間があれば、もっと英語の実力は伸びていたことでしょう。

センター前の1~2ヶ月は、(1)単語テスト、(2)文法問題の復習、(3)高校で解いたセンター模擬試験の解説、の三つに授業内容を絞って、ひたすら繰り返してこれをやってもらいました。おかげで単語と長文の実力はずいぶん伸びたと思うのですが、あえて言えば文法問題が最後までネックだったかもしれません。本人も、センター試験では大問4・5・6の長文が得意で、大問1・2・3の単語・リスニング・文法問題が苦手だと話していました。英単語についても、かなり難しい単語をたくさん覚えているいっぽうで、中学生レベルの基本的な単語を意外に忘れていたりすることがあって、そのギャップを埋めるのに最後まで苦労していた印象がありました。

長文問題についてはかなり正答率が上がっていました。調子がいいときは全体で8割くらいの正答率だったようです。本人は、細かい文法や構文が分からなくても、直感的に選択肢を絞ることができるのだという話をしていました。その解き方に少し危うさは残るのですが、模擬試験などでは安定して良い点が取れていたのも、実力は確実についていました。またSくんの場合は、センター試験の結果だけでなく、二次試験の実技テストも重要な要素となります。まだ状況は分かりませんが、春に良い報告が聞けることを祈っています。

(文責 百木 漠)

## 『中学数学』（水曜4限）

担当 浅野直樹

この冬学期はそれぞれが苦労しながらも自分の課題に向き合っている姿が目立ちました。『山びこ通信』では数学の楽しさを前面に押し出すことが多いのですが、今回は苦しさに焦点を当ててみます。

単純なこととして、理解できなかつたり問題が解けなかつたりすると苦しく感じます。教科書や参考書の記述をいくら読んでも理解できないときや、問題集の解答・解説を読んでも意味がわからないとき、そして誰かに説明してもらってもついていけないときなどです。これだけでも十分苦しいのですから、テストの点数のことで余計な苦しみを負いたくはないです。テストの意義は本当は理解できていないのにわかったつもりになっている部分を明らかにするところにあるのであり、自分が何をできないのか把握できているならそれ以上落ち込む必要はありません。

理解できないということをもう少し掘り下げますと、複雑な事柄を自分なりにじっくりくるまで位置づけられていないか、あるいは前提となる用語や概念、解法パターンなどの知識が足りていないかのどちらかであることがほとんどです。前者の場合は問題を解こうと焦らずにじっくりと自分の頭で考えてみるのが重要です。逆に後者の場合は教科書等に沿って素直に用語や解法を確認することが求められます。

別種の苦しみとして、理解はできているのだけれども計算ミスなどが多くて困るということがあります。苦しみというよりも腹立たしさといったほうが適切かもしれません。この場合はその腹立たしさを次へのエネルギーにしつつ、一呼吸おいて落ち着いて取り組むことです。あるいは単なるミスに見えても本当は理解不足だったということもあり得ます。

どこで苦しみをを感じるかは人それぞれです。山の学校のクラスではどこで苦しんでいるのかを明らかにしようとして私も努力していますが、自分のことを一番よくわかっているのは自分のはずです。そして何より学校、家庭、山の学校などあらゆる場で粘り強く取り組むということが大切です。今は苦労していることでも一度わかっただけで簡単です。そして一度わかればそれを忘れたとしてもすぐに思い出せます。「あの時はこんな簡単なことで苦しんでいたのだなあ」と後で思い返せるように、苦しみに逃げずに乗り越えられるよう日々少しでも進んでいきたいです。

(文責 浅野直樹)

「先生、ピタゴラス数って何ですか？」と質問してくれたのは、H君でした。以前、平方根の計算についても同じくH君から質問がありましたが、その延長線上で、三平方の定理とのかかわりで出てきたのだと思います。ピタゴラス数とは、 $x^2+y^2=z^2$ が成り立つような、 $(x,y,z)$ の組み合わせのことです。たとえば(3,4,5)や(5,12,13)がそれにあたります。「では、そうした組み合わせは無限にありますか？」というのが、H君の次の質問でした。そのような関心を示してくれたので、それについて考察したものが、以下の記事です。(ただしこの日の参加者のみとなります)

H君の考察

n	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	
二乗の数	1	4	9	16	25	36	49	64	81	100	121	144	169	196	225 (256)	
差		3	5	7	9	11	13	15	17	19	21	23	25	27	29	31

n	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
二乗の数	256	289	324	361	400	441	484	529	576	625	676	729	784	841	900
差		33	35	37	39	41	43	45	47	49	51	53	55	57	59

隣り合う(自然数の)二乗の数の差に注目します。するとそれは2ずつ増える奇数であることが分かります。その中に出てくる(自然数の)二乗の数を調べると、まず $9=3 \times 3$ が見つかります。すなわち、 $3 \times 3$ は、 $5 \times 5$ と $4 \times 4$ の差を埋める数だと分かります。よって、(3,4,5)が一つのピタゴラス数です。

次に差の中で二乗の数になるのは25です。これは $13 \times 13$ と $12 \times 12$ の差を埋める数です。よって(5,12,13)もピタゴラス数です。他にも、 $(x,y,z)$ のxを7, 9, 11, 13, 15...と変えていくと、(7,24,25)、(9,40,41)、(13,84,85)、(15,112,113)...と見つかっていきます。

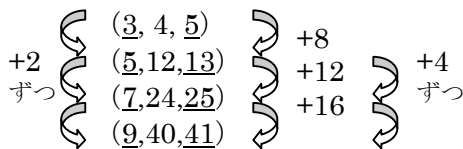
上のリストに無い大きな数では、次のように調べました。差の並びをn番目まで数えると、その値は $2n+1$ です。すなわち $2n+1=x^2$ です。 $x^2$ を差に持つ、隣り合う二乗の数は、 $y^2=n^2$ 、 $z^2=(n+1)^2$ です。 $2n+1=x^2$ を解けば、y, zも求まります。たとえば $x=15$ だと、 $2n+1=225 (=15^2)$ を解いて、 $n=112$ 。よって、 $y=112$ 、 $z=113$ と求まります。よって、ピタゴラス数は $(\sqrt{2n+1}, n, n+1)$ と表され、nを増やすことで無限にあることが分かりました。

K君の考察

$(x, y, z) = (3, 4, 5)$ 、 $(5, 12, 13)$ は知っていたので、ここから出発して考えた。

まず、xが3→5になっていることから、xが2ずつ増えるのではないかと予想した。そこで $x=7$ として探すと、(7,24,25)が見つかった。

するとzは5→13→25となっており、5→13には8増え、13→25には12増えている。次は16増えるのではないかと予想した。すなわち $z=41$ 、 $x=9$ 。またyはzと1違いなので、 $y=40$ 。実際に計算してみると、 $9^2+40^2=81+1600=1681$ 。 $41^2=1681$ 。よって(9,40,41)もまたピタゴラス数である。



上のことから、xは2ずつ増え、zは増え方が4ずつ増えるという法則が見つかった。この法則を使って順次、(13,84,85)、(15,112,113)...と見つけていくことができる。

ちなみにxは3から始まって+2ずつ増えているので、奇数+偶数=奇数である。また、zは5から始まって+8、+12、+16、+20...と増えているので、奇数+偶数=奇数である。yはz-1なので、奇数-奇数=偶数である。

よって、ピタゴラス数は2つの奇数と1つの偶数からなることが分かる。

H君はまず、自然数を二乗して、一つずつ書き並べていきました。そして早速、その差が3、5、7、9...と奇数であることに気が付きました。その着眼点が大変素晴らしいと思いました。(3,4,5)、(5,12,13)が既知だったことから、12と13の差が1であることがヒントになったようです。

一方K君もまた、(3,4,5)、(5,12,13)から出発して、帰納的にピタゴラス数を発見する過程で法則性を見出しています。zの増え方が+8、+12、+16、+20...であるという数字の並び具合に、さらにその差(階差)に注目したのがひらめきでした。また奇偶性にもメスを入れているのが特筆すべき点です。

これは高校の範囲になりますが、数列の計算を習えば、zは、 $\Sigma(4n)+1=4 \cdot n(n+1)/2 + 1 = 2n(n+1)+1$ と表すことができます。これはすなわち奇数です。また $y=z-1=2n(n+1)$ は偶数であり、 $x=2n+1$ は奇数。確かにK君の分析通りとなっています。よって、K君はあともう一步踏み込めば、ピタゴラス数の解析的な表示を見出すことができると期待しています。

またこの後に、「数学オリンピック」について質問がありました。そこで最近は、JJMO(ジュニア日本数学オリンピック)の過去問

の中から幾何の問題を選んで解いています。だいたい1回の授業で1~2問を解く調子です。大人でも解けるとすごく嬉しくなるような良問ばかりで、また機会があればご紹介したいと思います。

(文責 福西亮馬)

# 『高校数学』(木曜4限)

担当 浅野直樹

今回は曖昧な事柄に名前を付け、指針を立てることについて書きます。

数学に限らず曖昧な事柄に名前を付けることによって整理しようとするのが学問の営みであると言えます。動植物に名前を付けて分類する博物学がその典型でしょう。社会学でも同じで、例えば「セクハラ」という言葉が誕生し普及したことには大きな意味合いがあると考えられます。

高校数学の分野の中で名前を付けることの威力を実感するのは数列です。数列そのものについても等差数列、等比数列、階差数列、等差+等比型数列などと分類しますし、部分分数分解、特性方程式といった解法に属する用語もあります。その他の分野では「はさみ打ちの原理」や「判別式」といった用語は多くの人に親しまれています。マセマの参考書のように新しい用語を開発しようという試みもあちこちで行われています。そもそも分野に名前を付けるのも大事なことで、現行の高校数学には分野名として登場しない「整数問題(整数論)」という分類を大学に入ってから初めて知ったときは衝撃を受けました。そういう意味では現行の数学ⅠA・ⅡB・ⅢCという分類よりも、基礎解析・代数幾何・微分積分・確率統計といった昔の分類のほうがイメージをつかみやすいです。

名前を付ければ指針を立てる準備が整います。再び数列を例に取ると、数列の和を考えるときは $\Sigma$ の公式を基本にしつつ、公式にないものは等比数列か部分分数分解を疑うこととなります。あるいは積分であればルートの形は置換積分、微分しやすい関数と積分しやすい関数との積の形になっているなら部分積分、三角関数は三角関数の公式で積分しやすい形に変形するといった方針です。こうしたことは「チャート式」にも書いてあります。

さらに大きな視野で考えることもできます。方程式は未知数と同じ数だけ有効な式が与えられると代入法で解ける、二次方程式はいざとなれば解の公式、三次以上の方程式は因数定理を使って因数分解、三角方程式は加法定理から派生する各種公式で未知数を1つにする、指数方程式は置き換え、対数方程式は底を揃えるか置き換え、といった具合に分野を横断してまとめるのもよいでしょう。

このようにして自分なりに名前を付けて方針を立てるという経験はきっと他の分野でも応用することができます。

(文責 浅野直樹)

# 『中学理科』(水曜3限)

担当 和田 浩

昨年12月、わたしたちは日本で皆既月食を観察する機会に恵まれました。ちょうど週末の夜のことだったので、ピリリとした寒空に気高くたたずむほの赤い神秘に、思わず息をのんだ方も、さぞかし多かっただろうと想像しております。……はて、しかし。皆既月食というのは、太陽と月の間に割り込んだ地球が、光の通路を遮断する現象のはず。つまり、皆既月食においては、陽光は月に到達しえないはず！ そうだとすると、あの夜わたしたちが目にした赤光の正体は、いったい何なのでしょう？

話はかわって今年の冬。日本列島は稀にみる寒気に襲われ、猛々しい雪がわたしたちの平穏な日常を脅かしました。この経験を通じて、日本の冬が、雪と人とのコロセウムにほかならないということを、改めて痛感させられました。しかし他面、大地に積もりゆく雪は、わたしたちをこの世ならぬ詩的世界へと誘ってくれます。白銀の世界がたたえる静かな美しさに心の眼を奪われることは、この季節にだけ許された法悦であるに違いありません。……むむ？「静かな」美しさ、ですと？ 言われてみれば、「静けさや 雪にしみ入る 除夜の鐘」なんて有名な句が、あったような、なかったような。先生、どうして雪景色は、静寂をとまなうのですか？

理科という科目は、こうした身近な自然現象の不思議を解き明かし、世界の真相に迫ることをその本質とする科目です。それゆえ、理科を学ぶということは、我々の生きる世界を深く知り、感じ、考えること、すなわち、深く生きることである、とすることができますと思います。

冬学期より開設された中学理科では、このように、身近な現象を通じて世界の真相に迫るというちょっと仰々しいコンセプトの下、一分野(物理・化学)を中心とした問題演習を行っています。受講生は、3年生のOさんと1年生のOくんの2人です。学校で一通り全分野の学習を終えた3年生のOさんは、高校受験や進学後の学習を見据えながら、光や音の仕組み、電流のはたらき、力と運動、化学反応やイオン、遺伝の仕組みなどを、網羅的に学習しています。1年生のOくんは、物質の状態変化、水溶液や気体の性質、火山や地震をはじめとした大地のはたらきなど、学校の進度にあわせて問題演習を重ねています。2人とも、自然現象に対する旺盛な好奇心をもって、毎週集中して問題演習に取り組んでいます。そして、2人の言動に、自然現象に対する鋭い閃きを垣間みることもあります。例えば、2人ともこの文章の冒頭に掲げた赤き月光の妙に気が付き、自分なりに調べ、考えたようでした。天晴。

ところで、理科という科目、もう一足抽象化すると、科学という知的領域には、世界の真相に迫ることの他に、もう1つ大切な役割があると思います。それは、わたしたちが生きる社会の未来を構想し、創造するという役割です。昨年12月の東日本大震災は、現代科学の歪な歩みを明瞭に浮かび上がらせました。その歩みを真摯に省みつつ、科学が人類や世界の未来を創るための清冽な泉として再輝することを、希求してやみません。そしてそのささや

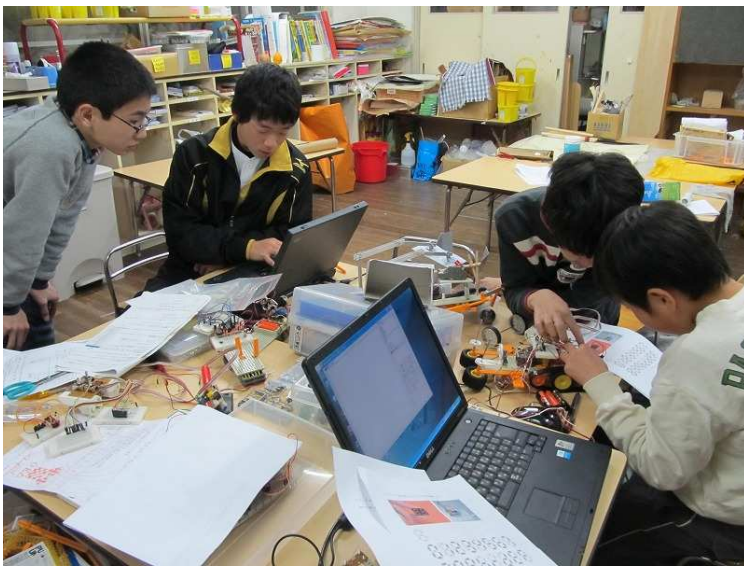


かな一端として、将来の社会を担う中学生に科学と社会との連関を学んでもらうことには、決して小さくない意味があると信じます。

先日、OさんとOくんは、種々のエネルギーの特徴や限界について学びました。この学習を通じて、理科という科目が社会とも有機的に連動していることを、感じてもらえたようです。また、幸運なことに、2人は共通して読書することの喜びを知っています。それゆえ、Oさんの高校受験とOくんの学年末試験が終わった頃、時間に余裕があれば、科学をモチーフにした小説等を紹介したり、それについて語り合ったりすることで、普段の問題演習とは違った角度から科学と社会との関連について考察してみたいと考えています。仮にそうした時間を確保できなかったとしても、読書することを通じて、科学と社会の在り方に対する想像力の翼を逞しく広げて欲しいと、心より願っています。

(文責 和田 浩)

## 『ロボット工作』 中学生 (金3限/隔週) 担当 福西亮馬



今学期は、ロボットの仕組みを深く理解するために、ある時、モーターの代わりに7セグメントLEDという表示器をつないで点灯させるという実験をしました。

LEDの7か所の電流を、ON、OFFすることで、0~9、A~Fといった数字や文字を表示させることができます。そのような制御をロボットのマイコンを使ってしようというわけです。

マイコンにはちょうど7つの出力ポートがあります。まずそれとLEDとを配線しなくてはなりません。

次に2進数でプログラム(命令)を書き

ます。たとえば「1」を表示させるには B'0011000'、「2」には B'0101111'...といった具合に、一体「どこ」と「どこ」の電流をON(プログラム上の1)にしてドライブすれば望みの表示が得られるので、LEDと2進数との「対応表」を作らなければなりません。どれも「にらめっこ」しながらの作業です。

そして、もしLEDの表示がおかしければ、それが配線によるのか、プログラムによるのかといった問題の切り分けが必要となります。そのようにロボットの基板やデバイス、プログラムのことをよく理解していないとできないのが、今回の勉強でした。

最初は1年生と2年生とに分かれ、どちらのチームが先にLEDを望んだように光らせることができるかで競走しました。先に述べたように、作業は二つあります。一つはハード面で、配線の作業。もう一つはソフト面で、プログラムの作業です。

結果は、さすがは2年生たち。ロボットの基板についてもプログラムについてもよく理解していた彼らは、自分の得意な所で役割分担をし、いち早く「0,1,2,...D,E,F」「0,1,2,...D,E,F」と光らせることに成功していました。私はどちらのチームも授業2回分はかかるだろうと踏んでいたのですが、お見事です。

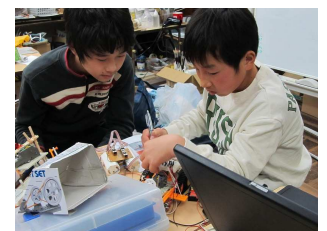
しかし、それだけで終わりではありませんでした。実際には、この後の方が素晴らしいと感じました。私は2年生たちに、次の課題として1年生たちに「教える」ことを頼みました。教えるには、3倍理解していないとできないとよく言われますが、その負荷を2年生たちはまじめな面持ちで引き受けてくれて、1年生たちに教えていました。その教え方が実に懇切丁寧でした。1年生たちが「どこでつまっているか」を理解しようと努めており、むしろ私が教えるよりも、遥かに「上手い」と顔負けするほどでした。それが頼もしく思われました。そのような先輩たちの指導のもと、1年生もまた見事実験を成功させてくれました。そのことで2年生たちもまた、さらに自信をつけてくれたように感じました。

今は、各自、それまでに作ってきたロボットについて、人前でも発表できるようにレポートを書いてもらっています。それによって、先輩から後輩へと「伝授」する伝統ができればいいと思います。

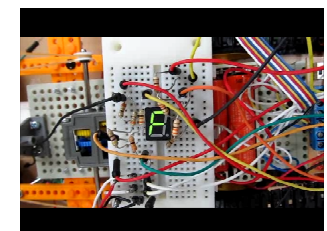
(文責 福西亮馬)



(プログラム担当のK君が、同じくその担当のM君に伝えている所)



(配線担当のA君が、同じくその担当のH君に伝えている様子)



(1年生たちもできました! 0,1,...E,Fと次々と浮かび上がる光のパターンに、飛び上がるほど嬉しかったようです。このあと色々な速さやパターンで点滅させて遊んだことは言うまでもありません)

## 『経済学入門』 (水曜 4:00~5:20)

担当 百木 漠

経済学入門は、相変わらず U さん、Ko さん、I さんの三人の生徒さんでわいわいと議論をしながら盛り上がっています。秋学期は佐伯啓思『大転換』を皆で輪読しました。今学期の前半は、毎回私 (百木) が経済に関するテキストやニュースを選んできて、それを事前に読んできてもらい、授業の時間に私が簡単な解説をして、それについて皆でディスカッションするという形をとっています。

例えば、12 月にはケインズの「孫たちの世代の経済的可能性」というエッセイを読んでもらって、成熟社会のあり方について議論しました。このエッセイは 1930 年に書かれたものですが、見事に現代経済の問題点の本質を言い当てています。ケインズは、その当時から見て 100 年もたてば世界の経済的な問題はほとんど解決し、その後に来る「退屈」こそが人類にとっての真の問題となるだろうという趣旨のことを書いています。この予言はある意味では外れ、ある意味では当たっていると言えます (確かに数字上で見れば先進国の物質水準は過剰なほどに高くなっているが、しかし貧困や格差などの問題はまだまだ残っている)。なぜこれほど生産水準が高くなっているにもかかわらず、我々がいまだに経済問題に苦しめられているのか、また将来に来る「退屈」の問題をいかに乗り越えればいいのか、という論点は今でも大いに考える価値があるものです。実際に授業内での議論も大変盛り上がりました。受講者の方々は、なかなかケインズの文章などを読む機会がないので、良い経験になったと喜んでくださっていました。

また、竹中平蔵さんと山口二郎さんが対談した雑誌記事を読んで、どちらの言い分に理があるのかについて議論したりもしました。竹中平蔵さんがいわゆる「小さな政府」派 (規制緩和、構造改革を支持)、山口二郎さんがいわゆる「大きな政府」派 (福祉政策、再分配を重視) の学者さんですが、この対談では両者の意見が真っ向からぶつかって、とても読み応えのあるものとなりました。この授業では、山口さんの意見のほうにやや支持が集まった (というよりは竹中さんへの批判の意見が強かった) ように思いますが、部分的な政策提案については、竹中さんの言い分に理があるところもありました。具体的には、構造改革・規制緩和によってグローバル化を推進し、日本経済を強くすることを目指すのか (竹中路線)、必要な増税はきちんと行ったうえで、社会保障を手厚くし、格差のない社会を目指していくのか (山口路線) といった方針の違いです。この日のディスカッションも興味深い指摘がたくさんなされ、大変盛り上がりました。

冬学期の後半では、原文二『21 世紀の国富論』を輪読していく予定です。原さんは、ビジネスの最前線で活躍されているベンチャーキャピタリストですが、正統派の経済学とは少し違った観点から「公益資本主義」という経済モデルを提唱しておられて、なかなか興味深いです。ぜひ今後も、皆で議論を盛り上げつつ、経済学入門の授業を続けていきたいと考えています。

(文責 百木 漠)

## 『行列の意味』 (土曜 2:00~3:20)

担当 福西亮馬

「A 県では、明日の天気は今日の天気だけに依存し、次のような確率で推移するという。一年間で晴れの日はおよそ何日あるか？」

$$\begin{bmatrix} \text{晴} \rightarrow \text{晴} & \text{晴} \rightarrow \text{雨} \\ \text{雨} \rightarrow \text{晴} & \text{雨} \rightarrow \text{雨} \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 2/3 & 1/3 \\ 3/4 & 1/4 \end{bmatrix}$$

これは確率や経済の分野で登場する「マルコフ連鎖」と呼ばれる問題です。右の数字の並びをあたかも「行列」とみなすと、実は「固有値問題」として、「およそ 252 日」(9/13 の確率で晴れる) と答えることができます。このように差分や、多くのクラスの微分方程式で表される問題は、線形であればそれゆえにすべて行列の世界で解くことができます。ただそのように「行列に置きかえる」ことについては、まだまだ十分な研究がなされているとは言いがたく、特にモデル (数学) を備えていない新しい分野においては、さらなる発展がこの行列によってもたらされることが期待されています。

このクラスでは、社会人の O さんと一緒に、上のような経済学の問題への応用を視野に入れながら、線形代数の勉強をしています。教科書は田村三郎著『文系のための線形代数の応用』(現代数学社) を使っています。

O さんは、仕事で経理をなされていて経済にもお詳しく、むしろ私の方こそ色々と教えていただいています。最近の「ゲーム理論」の動向や、その第一線で、日本のしかも「若手」が多く活躍していること、また以前は理系というくりだった人たちが、率先して、これまた以前は文系とされていた分野に数学 (モデル) を持ち込んで参加することが (そして O さんのように理系に興味を持たれるという「逆」もまたしかり!)、ここ最近になって非常に増えてきたということをお話していただきました。そして O さんが「文系も理系も、本当はもうとっくにそうした垣根は関係がなくなっているのですがね」と仰ったことが大変印象的でした。

O さんは、インターネットで読書猿さんという方のブログの「凄さ」に共感し、そのメルマガ時代から触発されて、「よし、何でも挑戦してみよう!」と思い立って、山の学校の門を叩かれたそうです。O さんもまた、ラ

テン語、ギリシャ語、フランス語、そしてこの行列のクラスと、その知的好奇心は止まることを知らずに精力的に活動されており、その熱意に推され「私も頑張ろう」という思いで敬服いたします。

そこで私にお手伝いできることはと言えば、それは私自身も、曰くラテン語の *studens* (現在進行形) であるために、一から経済学の勉強をするかたわら、固有値問題という「視座」を共有することです。それは現代数学に咲く一つの花であり、「触れる」だけでも大いに知的興奮が味わえます。もし行列で表現できれば、その問題は「より深く分かった」か「解けた」と言えます。普段何気なく見過ごしている出来事を、「数学に落とし込めるかどうか」と念頭に置くことは、ちょうど日本語で普段考えていることを英語に直して見て「ああ、そうか」と納得できるように、より本質的に「ものを見る」ということの手助けとなるでしょう。たかが行列、されど行列。文系、理系を問わずに様々な分野で交流し、結節点を作る言葉の一つが英語であるならば、数学もまた一つの言葉であり、わけても、行列は「数学の中の英語」だと思います。

以上、雑感混じりに書いてしまいましたが、教科書の最後には、「線形計画法とゲーム理論」という興味深いトピックがあります。ぜひたどり着いて、数学の「泥臭く」かつ「具体的」な手ごたえを堪能しましょう。またせっかく行列で表現するメリットとして、ソフトを使ってマシンパワーで問題を解くということにも触れたいと考えています。

(文責 福西亮馬)

## 『漢文入門』(月曜 5:10~6:30) 担当 木村亮太

漢文入門クラスでは、冬学期の始めからは曹植「洛神賦」(『文選』巻19)を、ちょっと長めのお正月休みを皆さんで、2月からは曹操、曹丕の楽府(詩の一種)を読んでいます。

Kさんの『三国志』に登場する曹操父子の作品を読みたい」という声から、これらの作品が選ばれたのですが、秋学期は「散文」が中心で、詩や賦のような「韻文」に触れる機会も少なかったため、ちょうど良かったように思います。

「洛神賦」は、曹植が洛陽の都から自分の領地へと帰る途中に、洛水(川の名前)のほとりで出逢った美しい女神に恋をするという幻想的な作品です。古来、中国には、川や湖のほとりで女神と邂逅をテーマにした作品は多くありました。曹植はそういった古典を素地に「洛神賦」を作り、当時の文学界の旗手となりました。

この作品が愛されたことを示すものとして、東晋の画家・顧愷之が描いた「洛神賦図」があります。これは、「洛神賦」の各場面を同じ一枚の画面のなかに描いた絵巻物で、クルクルとスクロールしていくことで、次々に移り変わるシーンを楽しめるという作りになっています。現在では、宋代の模写しか残っていませんが、その写真が載った図版集があったので、ある程度まで文章を読み進めたあと、私たちも図版を見てみることにしました。

文字と絵とを対照させると、イメージしていたとおりの場面もあれば、そうでない場面もあり、文章の理解にも新たな発見がありました。例えば、「六匹の龍がおごそかに首をそろえて(車を牽く)」というシーンでは、定規で引いたように横一列で龍が描かれていました。一方、「輕舟に乗って流れをさかのぼる」のシーンに描かれていた「輕舟」は、随分と豪華な二階建ての屋形船でしたし、また、曹植と女神、二人きりで過ごしたと思っていたシーンでも、曹植のお供の者たちがどこに行くにも付きっきりだったのには驚きました。

「洛神賦」は比較的、長い文章だったので、次はちょっと短めのものを、ということで、二月からはぐんと短く、曹操父子の詩を多く読むことにしました。短く、定型の「詩」という文体を選んだことで、ひとつ新しいことに挑戦しています。それは、句読点のない、「白文」に、自分で点を置くところから読み始める、という試みです。

私が漢文入門クラスを担当するようになって初めて扱った『説苑』では、句読点やかぎかっこのほか、人名・地名に傍線の付いているテキスト(標点本)を使いました。それから、傍線のないものを使ったことはありましたが、句読点のないテキストはまったく初めてです。慣れるまでの間は苦勞することもあるとは思いますが、文字だけから意味を考えて、もっとも相応しいところで点を切ることができるようになると、また新しい楽しみが増えるとともに、自分で読める本の幅が一気に広がっていくと思います。

(文責 木村亮太)

## 『英語一般』(木曜 14:10~15:30) 担当 浅野直樹

長い間英語に触れていないという状況から一年数ヶ月前に始まったこのクラスも、今では文化差を感じる事ができるくらいのところまで展開してきました。ここまで来るともうあとは好きなようにできます。興味のある分野の文章を読むこともできれば、英語で会話することもできるでしょう。この段階まで達してから英語に触れないでいるとどうなるのかは試したことがないのでわかりませんが、最低限の部分は忘れないにしても感覚が鈍るのは間違いないでしょう。今回はこれまでに身につけた英語力を生かしていかにも楽しむかということを考えていると思います。

一番手軽なのはインターネット上で英語を読んで情報を得ることでしょう。英語圏の国が発祥のものは言うに及ばず、その他の事柄でも英語で日本語よりも詳細な情報を得ることができる可能性は高いです。場合によっては同じ事柄についてであっても日本語と英語とで論調や視点が異なることもあります。試しに英語版の **Wikipedia** でいくつかの語を調べてみてください。小学生や中学生が日本語に関して味わうのと同じような、知が開かれることへの感動があるはずですよ。

google などの検索エンジンを使う際には少し注意点があります。まず検索オプションで言語を英語に設定します。検索語を入力するときの一つながりの語句は”**industrial revolution**”のように””で囲みます。日本語の場合はスペースで区切られた部分が一つのまとまりだとわかりますが、英語の場合はそもそも語と語の間をスペースで区切っているの、それだけでは一まとまりだとわかりません。また、英語は複数形や動詞の活用、派生語で語尾が変化することが多いので、**industr\***のようにたいていの場合は\* (アスタリスク) で表されるワイルドカードを使うようにします。もっとも最近の検索エンジンは工夫されているのでこれらのルールを守らなくても目的のページにたどり着けることも多いです。

まとまった分量を読むなら本や雑誌です。インターネットがいくら発達しても本や雑誌という概念がなくなることはないでしょう。インターネットを介して売り買いされようが、内容が電子書籍として販売されようが本は本ですし雑誌は雑誌です。そして本にしても雑誌にしても英語で得られる情報は圧倒的に多いです。これらは興味に応じて読み進めればよいです。

お気に入りの本や雑誌を見つけたら読書会を企画してもおもしろいかもしれません。一人で読んでいるときにはよくわからなかった部分や勘違いしていた部分が他の人と話し合うと解決されることがよくあります。書かれている内容をもとにしつつもいろいろなアイデアが膨らんでいくこともあります。この山の学校でも以前に *Harry Potter and the Philosopher's Stone* を読書会で一冊読むという経験をしました。今後新たな読書会が始まるかもしれません。そうなればホームページ等でお知らせいたします。

英語の音声を聞くということもインターネットのおかげで最近では容易になりました。以前にもご紹介した **BBC** や **VOA**、**NHK** ラジオのシリーズなどに加え、**YouTube** などを探せば面白い動画があるでしょう。大学の講義などが収録された **iTunes U** もおすすめです。昔からある映画や歌もいいですし、誰かと英語で会話するという機会がある人もいます。

上で述べたような意識的な活動をしなくても、実は日常生活の中に英語は多数入り込んでいます。電車に乗れば英語での車内放送や表示が必ずといっていいほどありますし、お菓子の包装紙などには英語が書かれていることが多いです。公衆トイレに行っても英語で説明されています。家電のマニュアル類もそうです。普段何気なく使っているカタカナ語ももともとなった英語を調べると思わぬ発見があるかもしれません。

一度英語の基礎を身につけると見える世界が変わるといっても過言ではありません。その新しい世界を見てみたい方はお問い合わせください。

(文責 浅野直樹)

## 『イタリア語講読』(月曜 18:40~20:00) 担当 柱本元彦

今学期から受講生が一名増えました。講師を含めてわずか三名ですが(つまりこれまでは一对一の個人授業だったわけです)、それでも<クラス>という感触が生まれ、「複数の人間がひとつの部屋のなかで一緒に何かをする」ことにはやはり格別な意味があるのだなあ、と今さらながらあらためて思われました。

前学期で読み残したデ・クレシェンツォを終えた後、新しいテキストとして<エッセイ>を取り上げました。美術関係の<コラム>を除外すれば、今までは基本的に<物語>の語り口でつづられた文章が中心でした。いわゆる客観描写の文章です。それに対して<エッセイ>は、著者の思いを直接組み立てた主観的な言葉で書かれています。このような文体は、慣れるまで少し難しいかもしれません。曖昧な(多義的な)表現を曖昧に残したまま、ある程度の許容範囲を保ちながら読みすすめ(がまんのしどころですね)、次第に明らかになる意味を後から捉えなおしていく必要もあります(もちろん最後まで解釈の余地は残されるのですが)。テキストに選んだのは、たまたま手元にあったエリ阿斯・カネッティの文章です(ドイツ語原文のイタリア語訳)。名著『群集と権力』(日本語訳は法政大学出版から)などで有名なカネッティは、イタリアでもよく読まれています。彼の小さなエッセイ集『**Potere e Sopravvivenza** (権力と生存)』から二編、「論語のなかの孔子」と「蜂谷医師の広島日記」を抜き出しました。身近なテーマですので、よりいっそうの興味をもって読めるのではないかと考えます。

(文責 柱本元彦)

## 『フランス語入門』 (金曜 7:50~9:10) 担当 武田宙也 ひろなり

「フランス語入門」は、この冬から新たな受講者の方を迎えて再び開講されることになりました。さて、フランス語をゼロから始めようとする方が多くが最初に戸惑うのは、その発音ではないでしょうか。というのも、フランス語では、日本人になじみのないさまざまな音を発音しなければならないのはもちろんのこと、綴りと発音の関係にまつわる規則（「この綴りはこのように発音する」というフランス語に特有のきまり）もとても多いからです。その結果、フランス語の単語の読み方は、いわゆる「ローマ字読み」とはたいへん異なったものとなります。もちろん英語の綴りと発音の関係もそれほど単純ではないとはいえ（ただこちらは、子どもの頃から親しんでいることもあって、日本人の多くにある程度なじみのあるものだと思います）、たとえばドイツ語やイタリア語と比べても、確かにフランス語の発音はやっかいなほうと言えるかもしれません。

さて、このように独特の発音を持つフランス語ですから、それをカタカナで表記することは（他の言語にもまして）困難を極めます。実際、日本語にカタカナ言葉として定着しているフランス語は意外に多いのですが、その中には原語とかけ離れた発音になっているものも少なくありません（たとえば「オードブル」や「ミルフィーユ」など）。外国語の発音練習におけるカタカナ表記とは、いわば自転車の乗車訓練における「補助輪」のようなものかもしれませんが、ことフランス語発音の「乗車訓練」に関しては、補助輪をつけずにいきなり全力疾走してみることが、（多少のケガはあったとしても）かえって上達の近道になるのではないでしょうか。

(文責 武田宙也)

## 『フランス語講読』 (日曜 9:10~12:00 隔週) 担当 武田宙也 ひろなり

「フランス語講読」では引き続き、美術史家のダニエル・アラス [Daniel Arasse] による絵画入門書、『絵画のはなし [Histoires de peintures]』を読んでいます。この本は、アラスが2003年にフランスのラジオ番組に出演した際の講話を文書化したもので、基本的には一般の美術愛好家を対象としています。とはいえ、内容的には必ずしも初心者向けということではなく、それどころか、ときにかなり専門的な議論も差し挟まれます。

たとえば、17世紀スペインの画家ディエゴ・ベラスケスの代表作《女官たち》を取り上げた章は、20世紀フランスの哲学者ミシェル・フーコーの『言葉と物』という著作に触れるところから始まります。というのも、そこには《女官たち》の有名な分析が含まれているからです。私が驚いたのは、アラスがこの本に言及する際に、「みなさんご存知」であるという前提のもとに、フーコーの議論の概要をかなり大胆に端折っていた点です。たしかにこの『言葉と物』は、1966年の出版当時、哲学書としては異例のベストセラーとなった本です。しかしながら、そこで展開されている《女官たち》の分析は、実際にはかなり込み入ったもので、またその理解にはある程度の専門的な知識を要するものです。

一般向けのラジオ番組で、この種の哲学書の内容を周知のものと想定して話を進められるということ。いささか大げさに言うならば、私はここに、かの国の人文知の裾野の広さを思い知った気がしました。

(文責 武田宙也)

## 『ラテン語初級文法』 (木曜 4限) 担当 山下大吾

今学期の当クラスはお一方の受講生を迎えて開講いたしました。一学期三箇月間でラテン語文法の基礎を固める方針の速習コースで、教科書は岩波書店刊田中利光著『ラテン語初歩 改訂版』を使用しております。毎週4課ほどのペースで、ゆっくり急ぎつつゴールを目指しております。

日程の都合上今年に入ってから開講となったため、まだそれ程過程を終えておりませんが、それでも練習問題では早くも語順の妙を感じさせるものが表れます。語形変化の多いラテン語ならではの楽しみの一面と言えるでしょう。

その練習問題で、文法上の機能は異なるものの、形態の上では同じ形になってしまうため二通りの解釈が可能となるといった例が見られますが、受講生のNさんはそれらを丁寧に読み解き、これまでほとんどのケースでその双方の答えをお答え下さっています。講師たる当方は、以前懸命に学んでいた折の自らの姿を思い返し、当時これ程の余裕があったかどうかと振り返りつつ、ラテン語のとる通常の語順に則った、また内容から見て無理のない「素直な」訳を正解としてお答えしております。

ところで一方の「意地の悪い」訳は往々にして、時に頬が緩み、時に眉をひそめるような意味となり中々捨てがたい魅力を持つものです。日本語のいわゆる「ぎなた読み」、落語の軽妙なやりとりなどはその好例と言えるでしょう。

文学作品などの定説と呼ばれるものも元をたどれば「素直な」読みの一つだったのでしょうが、長期間に渡る賛同更には賞賛に塗り固められ、いつの間にか動脈硬化を起こしている可能性も考えられます。ラテン語に限らず、普段我々が触れ、特に当たり前と捉えられがちならゆる現象に対して、奇を衒うことなく、あらためて「素直に」一人自らの目で見直してみるという行為が求められているのかも知れません。たとえその目が知らぬ間に「色眼鏡」を通したものになっていたとしても、それも立派な個性として認められ新たな読みが可能となり、ひいては普遍に寄与する手掛かりになるものと思われまふ。このような考えがふと浮かぶのも、文法表というガンジガラメの規則に毎週取り組まざるを得ないラテン語学習の恩恵の一つなのかも知れません。

(文責 山下大吾)

## 『ラテン語初級講読A』(水曜4限) 担当 山下大吾

“O tempora, o mores!”「何と言う時代、何たる人の道か」—西洋で最も有名な歎きの言葉とも言うべきこの句が、今学期からこのクラスで取り組んでいるキケローの『カティリーナ弾劾』には収められています。受講生はこの講読クラス開講以来継続受講下さっているお二方です。その内のAさんは、残念ながら前学期からお仕事が多忙となりご欠席される機会が多くなりましたが、この句を読んですかさず「今度の取締役会の答弁だ」との感想を述べられました。今お一人のHさんは、この所テキスト朗読後の訳が以前よりたどたどしく、いわゆる直訳調になってきたようです。Hさんご自身の言葉を、キケローのテキストから直に読み取ろうとされている証だと思われまふ。

キケロー壮年期の43歳、当時のローマで最高の政治権力を担う執政官となり、その経歴の頂点とも言うべき折にこの弁論は行われました。謀反を企てるカティリーナに対し渾身の力を込めた言葉が発せられ、修辭的技巧はその力が自ら際立つ箇所で遺憾無く用いられています。弁論冒頭に見られる修辭疑問の繰り返し、要所要所で現れるトリコーロン、更にはとどめとも言うべきキアスムス。そのような技巧にまして目を引くのが、キケローその人を指す一人称単数代名詞egoの多用です。ラテン語では動詞の活用語尾で主語が特定されるため、特殊な場合以外このような代名詞は用いられないのが通例で、これほどの多用には一読目を瞠ります。

これは弁論、すなわち発話を基にしたジャンルならではの特徴という可能性も考えられますが、キケローはカティリーナに対峙するのみならず、このような不穏な動きに明確な態度を取ろうとしない、その場で彼の言葉に耳を傾けている元老院議員に対しても、執政官としての責務を果たしている自己の姿を前面に押し出そうとしているのかも知れません。これらegoには、そのようなキケローの声を、活字を通して生き生きと蘇らせ、その姿まで眼前に躍動させるほどの迫力が備わっています。

この原稿を書いている時期、『カティリーナ弾劾』の講読が始まる8時前にお山の階段を登ると、西の空には宵の明星がひときわ明るく輝き、少しく上を見やれば木星がお忘れなくと光を投げかけています。その共演の中、ほぼ一月ごとに、他ならぬ月が日々その形を変えながら彼らを足早に追い抜き、上空高く君臨するようになります。前学期読み終えた『スキーピオーの夢』の説によると、彼らにはそれぞれ異なった音色が付いているとの由。今日はどんなハーモニーを奏でているのかとしばし仰ぎ見ながら、離れの教室に向かう日々が続いております。

(文責 山下大吾)

## 『ラテン語初級講読B』(木曜2:10~3:30) 担当 山下大吾

今学期の当クラスは、引き続きキケローの代表的な哲学的対話篇である『老年について』を読み進めております。受講生は変わらず継続受講下さるCさんお一方、静かな昼下がりの離れの間で、キケローの言葉を一語一語噛みしめるように読んでいく日々が毎週営まれています。

テキストは、老年に対して向けられる非難、欠点を四つに大別し、大カトーがそれぞれに対して反駁するという場面に入りました。その一つ、老年は公の活動から遠ざけてしまうという非難に対し、彼は共和制ローマの最高機関であるsenatus「元老院」がsenex「老人」という語に由来するという事実を挙げて反論しています。思慮や理性を働かせる精神的活動には、体力に勝る青年壮年期ではなく、落ち着いたある老年期こそ最も相応しいという趣旨です。

ここで自然と思いきこされるのが παιδεία (paideia)「教育」、あるいは παιδεύω (paideuo)「教育する、教える」というギリシア語です。これらは παῖς (pais)、すなわち「子供」という、senex とは人生の過程において丁度正反対の対象を意味する語から派生しています。

ギリシア人は、子供を養育すること、子供を一人前の人間に育て上げることが「教育」、更にはその結果である「教養」に繋がると考えました。この思想は、子供たちを育て上げる義務を負う大人の世代にその主眼を置いていることは間違いありませんが、その世代の人々も当然自身の子供の折に経験した「学び」を活かし、更に先人の知恵を活かしながら、主客双方の視点で彼らの養育を行うこととなります。まさにこの点で、παιδεία, παιδεύω というギリシア語には、子供に対する態度は、人生のいかなる時点においても、そのままの形で他ならぬ自分自身に跳ね返ってくるという意味が含まれるものと思われます。

『老年について』の 26 節には、ギリシア七賢人の一人として名高いソローンのものした「毎日何かを学び加えつつ老いていく」という言葉が収められています。そもそも人間は「完全」を理想としながらも、この世に生きている間、死に至るまで、その究極の対象にはやはり到達しえぬであろう不完全な存在です。究極の「一人前の人間」に到達しえぬ我々は、たとえ老年に足を踏み入れたとしても依然として「子供」であり、終生「学ぶ」行為を続け、努力するべく運命付けられているのでしょうか。あまたあるギリシア語の文法書で、動詞の活用代表例として παιδεύω を目にする機会が多いのも、適度の音節数という「教育的」配慮は勿論として、何かしら意義深いものが感じられます。

(文責 山下大吾)

## 『ラテン語初級講読 C』(金曜 4 限)

担当 前川 <sup>ゆたか</sup> 裕

このクラスでは、セネカ『ルキリウスへの手紙(倫理書簡集)』を継続して読んでいます。今学期は第 41 書簡から読み進めています。長さや内容などを考慮しつつ、適宜書簡を選択して読んでいます。受講生はお二人です。授業では本文を読み訳をするというオーソドックスなスタイルです。初級講読ということで、文法事項を随時チェックしながら、知識を確認しています。書簡もかなりの量を読んできましたので、大分セネカのスタイルにも慣れてきました。これは前も出てきた、ということも感じながら、意見交換をしています。お二人とも京都市外から来られていますが、予習をされて山の学校まで通われています。

セネカの書簡集は、本当に手紙として送られたものではなく、書簡のスタイルで作られた哲学論文だと考えられています。第 42 書簡では人間の性悪説と読みとれる部分も出てきました。そこでセネカは、人間の悪は普段は弱いものであるが、たまたま力を与えられた時には大胆に振る舞うものだといいます。今風に言えば「凶に乗る」という感じに近いのかと思いました。人間の本質の洞察においても、優れた見解が見られる書簡です。

一回につき、ロウブのテキストで 16 行程度を 1 時間弱で読みます。80 分の授業時間ですと少し余りますが、そこではおまけの話をしています。古代ラテン語の写本や、ラテン語を巡る状況の解説をしたり、西洋古典に関する日本語書籍や洋書の紹介をしたりしています。書籍類については山の学校の蔵書として持っているものもあります。

次学期も引き続きセネカの予定です。初級講読は、初級文法修了程度(独学でも構いません)でご参加でき、参加者に合わせた進度で進めます。興味を持たれた方はぜひご連絡ください。

(文責 前川 裕)

## 『ラテン語入門・中級講読』(月 4・金 4)

担当 広川直幸

入門の授業では、Hans H. Ørberg の *Lingua Latina II: Roma aeterna* を学んでいる。もうすぐ 40 課が終わる。一回の授業でおよそ 100 行本文を読み、本文を読み終えたら、各課の最後にある大量の練習問題を解くのに一回の授業を充てることにしている。

*Lingua Latina* は、第 1 巻の *Familia Romana* が基礎、第 2 巻の *Roma aeterna* が応用という構成なので、第 2 巻に入った今、実際に行っていることは入門の段階を超えているのだけれども、他によい名が思いつかないので、授業名は敢えてラテン語入門のままにしてある。既にやさしい原典なら読める段階に至っているのだから、教科書の学習と平行して各自で好みのものを読んでいただくのがよいであろう。

中級講読では、ウェルギリウスの『アイネーイス』を読んでいる。今のところ一回に 30 行程度のゆっくりとしたペースで進めている。教科書には、Clyde Pharr, *Vergil's Aeneid: Books I-VI* を使っている。この本は、どのページを開いても、そこに印刷されている原文を読むために必要な語彙すべてが目に見えるように工夫されている。要するに、語彙を調べるためにページを繰る必要が全くないという画期的な註釈書である。原典を読んでみたいけれども、辞書ばかり引いていて、原典を読んでいるのか辞書を読んでいるのか分からなくなってしまう方だという方は多いかもしれない。そういう方は一度この註釈書を使ってみて欲しい。

(文責 広川直幸)

## 『ギリシャ語入門 A・B』(火3・隔週土 2:00~5:00) 担当 広川直幸

入門 A では、Peckett & Munday, *Thrasymachus* を用いて古典ギリシャ語の初歩を学んでいる。一年でおよそ半分まで進むことができたので、あと一年で終えることができそうである。

*Thrasymachus* は、トラシュマコス少年の物語を読みながらギリシャ語を学ぶ読解中心の教科書である。前半15課はルキアノスの対話集を髣髴とさせる対話から成り立っており、これが実に面白い。語彙と文法を導入しながら、つまり使える語彙と文法が制限された状態で、会話を成り立たせるだけでも困難であるはずなのに、この教科書は愉快的やり取りを見事に成立させている。しかも、原典からの引用や改変ではなく、著者が自分で書いた立派な古典ギリシャ語である。正直その能力には舌を巻かざるを得ない。

読解中心の教科書で勉強していると、勢い屈折の学習が不十分になりがちである。週一回の授業では屈折の練習にあまり時間を割くことができないので、各自で十分に練習していただきたい。

入門 B では、往年の定番教科書 *First Greek Book* (絶版) を使って古典ギリシャ語の初歩を学んできた。毎月第2、第4土曜日に2コマずつ授業を行っているので、一度にかなりの量をこなす強行軍になってしまい、詳しい文法の説明や屈折の練習をしている暇がなかったことが悔やまれるが、それでも何とか一年間で教科書を終えることができたのは、ひとえに受講生の努力の賜物である。

このクラスは四月から初級講読に昇級する。初級講読では、文法の初歩を復習しながらプラトンの『饗宴』を読む予定である。教科書には Louise Pratt, *Eros at the Banquet* という初学者向けの註釈書を用いる。初級文法を修めていれば参加可能である。

(文責 広川直幸)

## 『ギリシャ語初級講読』(火曜4限) 担当 広川直幸

「マタイによる福音書」を1回に約4頁のペースで読んでいる。翻訳などで知っている有名なエピソードであっても原典で読むとがらっと印象が変わることがあるのが興味深い。また、古典ギリシャ語と新約ギリシャ語がかなり異なるということを具体的に理解することができたのが収穫であった。『新約』のギリシャ語は、所謂古典ギリシャ語(紀元前5世紀頃のアッティカ方言)とは時代が異なる上に、セム語の影響を受けているので、古典期のギリシャ語の知識をそのまま用いて読むことができるとは考えないほうがよい。

「マタイによる福音書」は今学期で読み終え、四月からは古典ギリシャ語以前のギリシャ語で書かれた『オデュッセイア』を読むことにした。初級文法を修得して、なおかつそれとは幾分文法が異なっても読んでもやろうという気概のある者なら受講可能である。

(文責 広川直幸)

## 『ギリシャ語中級講読』(金曜3限) 担当 広川直幸

トゥーキューディデースを読んでいる。1巻の107節まで進んだ。1巻89節から118節までは、サラミスおよびプラタイアの戦いにおいてギリシャがペルシャを撃退してから、ペロポネネソス戦争開戦前夜に至るまでのアテーナイの興隆の歴史が淡々とした筆致で綴られている。この時期にアテーナイの文化は絶頂に達したのであるが、それらには全く触れられず、記されているのは、ただ戦争の歴史のみである。演説の時はあれほど破綻と勢いに満ちていた文体も、事務的と言えるくらいにおとなしい。

授業では、できるだけ文法的に正確に読むことを第一にし、文法が破綻している場合には、なぜ破綻したのかを考察することになっている。あわせて、異読にも注意するようにしている。授業で用いている Alberti の校訂本は、Jones 校訂の OCT に比べると研究用註が充実しており、また、大胆な推定読みを採用していることがあるので、よい刺激になる。

来学期以降もトゥーキューディデースを読み続ける。

(文責 広川直幸)

——本誌を手にとり下さった方へ

山の学校は、小学生から大人を対象とした新しい学びの場です。「Disce libens. (楽しく学べ)」がモットーです。中高生のための徹底した少人数指導のクラス、社会人のための語学クラスも充実。子どもは大人のように真剣に、大人は子どものように童心に戻って学びの時を過ごします。

「山びこ通信」は、その様子をお伝えすべく、学期毎に年三回発行しているものです(春学期は6月、秋学期は11月、冬学期は2月)。ホームページでも、クラスの様子やイベント(毎月開催・無料)の情報などを発信しています。学ぶことが楽しくて仕方がない!もし、そうした気持ちを本誌を通し、少しでも皆様と共有することができたとすれば、望外の喜びです。

お申し込み・お問い合わせはこちらまで

TEL: 075-781-3215

FAX: 075-781-6073

E-mail: taro@kitashirakawa.jp

http://www.kitashirakawa.jp/yama-no-gakko

